天草町文化財調査報告書　第１集

上木原遺跡

県営羊角湾周辺地区中山間地域総合整備事業（木原工区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査

２００３

熊本県天草郡天草町教育委員会

写真１　上木原遺跡遠景　（南より）

写真２　上木原遺跡遠景　（北より）

写真３　Ｓ－002完掘状況　（南西より）

写真４　Ｓ－003弥生土器出土状況

天草町文化財調査報告書　第１集

上木原遺跡

２００３年

天草町教育委員会

序　文

天草町教育委員会では、熊本県天草地域振興局農政部農地整備課の委託を受け、羊角湾周辺地区中山間地域総合整備事業にともない天草町大江上木原に所在する上木原遺跡の発掘調査を実施いたしました。

今回報告する上木原遺跡の発掘調査は、平成13年度に実施した発掘調査報告書で、弥生時代後期の集落跡の発見という大きな成果がありました。特に、弥生時代遺跡の発掘調査は天草島内において初めてのことであり、弥生時代の遺構、集落跡の発見も初めてという天草考古学史上重要な発掘調査となりました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展に寄与できれば、喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、多大な御理解・御協力をいただいた熊本県天草地域振興局農地整備課、天草町大江木原地区関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成15年３月31日

天草町教育長　小　出　昌　廣

例　　言

1　本書は、熊本県天草郡天草町大江字上木原に所在する「上木原遺跡」の、熊本県中山間地域総合整備事業（木原工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、熊本県農政部の依頼を受けて、平成13・14年度に天草町教育委員会が実施した。現地調査は平成13年度に行い、整理作業及び報告書作成は平成14年度に行った。各年度の調査経過は、第１章に記す。

3　調査は、天草町教育委員会が主体となり実施した。

4　現地での遺構実測は、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

5　現地調査での写真撮影は松本が行い、遺構の一部については長谷部善一氏・上高原　聡氏・洲崎明子氏の協力を得た。空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。

6　整理作業及び報告書作成は大江中学校跡地１階技術科教室にて行った。

7　出土遺物の実測は松本が行い、一部を㈱埋蔵文化財サポートシステムに業務委託した。また、遺構図、出土遺物実測図のトレースは松本と斉藤幸子が行い、一部を㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

8　出土遺物の写真撮影は㈱埋蔵文化財サポートシステムに業務委託した。

9　調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は天草町教育委員会が保管している。

10　本書は、天草町教育委員会生涯学習課文化・スポーツ係松本が執筆・編集した。

凡　　例

1　現地調査での地形測量図は１／200の縮尺で作成した。本書収録の際の縮尺は挿図目次を参照されたい。

2　現地調査での遺構実測図は、１／20の縮尺で作成した。本書収録の際の縮尺は挿図目次を参照されたい。

3　遺物の実測図は土器・石器ともに１／１の縮尺で作成した。本書収録の際の縮尺は挿図目次を参照されたい。

4　本書におけるレベル高は、すべて海抜を表し、方位は国土座標法第Ⅱ種系を基準としたメッシュ杭に従い設定しているため、座標軸上の北を示す。

本　文　目　次

序　文
例　言
凡　例

第Ⅰ章　調査の経過
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過　……1
　第３節　調査の方法……2
　第４節　調査組織……2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……9
　第２節　歴史的環境……9
第Ⅲ章　遺跡の概要と層位
　第１節　遺跡の概要……17
　第２節　遺跡の基本層序……17
第Ⅳ章　調査とその成果
　第１節　調査１区の調査成果……21
　　(1) 旧石器時代～縄文時代の遺物……21
　　(2) 弥生時代後期～終末期の遺構と遺物……21
　　(3) 遺構外出土の遺物……27
　第２節　調査２区・３区の調査成果……35
　１　調査２区の調査成果……35
　　(1) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物……35
　　(2) 近世～近代の遺構……51
　　(3) 遺構外出土の遺物……51
　２　調査３区の調査成果……61
　　(1) 旧石器～縄文時代の遺物……61
　　(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物……61
第Ⅴ章　まとめ
　　旧石器時代～縄文時代……67
　　弥生時代後期～古墳時代前期……67

製塩土器について……69

参考文献……71
写真図版
報告書抄録
あとがき

挿　図　目　次

第１図　上木原遺跡周辺地形図……4
第２図　調査区位置図（Ｓ＝600分の１）……5
第３図　周辺遺跡地図（50,000分の１）……11－12
第４図　調査１区出土石器実測図（Ｓ＝１分の１）……22
第５図　調査１区遺構配置図（Ｓ＝150分の１）……24
第６図　Ｓ－003実測図（Ｓ＝60分の１）……25
第７図　Ｓ－003遺物出土状況図（Ｓ＝60分の１）……26
第８図　Ｓ－003出土遺物実測図（1）（Ｓ＝３分の１）……28
第９図　Ｓ－003出土遺物実測図（2）（Ｓ＝３分の１）……29
第10図　Ｓ－003出土遺物実測図（3）（Ｓ＝３分の１）……30
第11図　Ｓ－003出土遺物実測図（4）（Ｓ＝３分の１）……31
第12図　Ｓ－003出土遺物実測図（5）（Ｓ＝３分の１）……32
第13図　Ｓ－003出土遺物実測図（6）（Ｓ＝３分の１）……33
第14図　調査１区遺構外出土遺物実測図（Ｓ＝３分の１）……34
第15図　調査２区・３区遺構配置図（Ｓ＝400分の１）……36
第16図　Ｓ－002実測図（Ｓ＝60分の１）……37
第17図　Ｓ－002炭化物集中範囲（上・上層、下・下層）（Ｓ＝60分の１）……38
第18図　Ｓ－002出土遺物実測図（1）（Ｓ＝３分の１）……39
第19図　Ｓ－002出土遺物実測図（2）（Ｓ＝３分の１）……40
第20図　Ｓ－002出土遺物実測図（3）（Ｓ＝３分の１）……41
第21図　Ｓ－002出土遺物実測図（4）（Ｓ＝３分の１）……42
第22図　Ｓ－006・007実測図（Ｓ＝60分の１）……45

第23図　S－006・007出土遺物実測図（S＝3分の1）……46
第24図　S－008・009・010実測図（S＝60分の1）……47
第25図　S－004・005実測図（S＝30分の1）……48
第26図　S－001実測図（S＝60分の1）……49
第27図　S－001土層断面実測図（S＝60分の1）……50
第28図　調査2区遺構外出土遺物実測図（1）（S＝3分の1）……54
第29図　調査2区遺構外出土遺物実測図（2）（S＝3分の1）……55
第30図　調査2区遺構外出土遺物実測図（3）（S＝3分の1）……56
第31図　調査2区遺構外出土遺物実測図（4）（S＝3分の1）……57
第32図　調査2区遺構外出土遺物実測図（5）（S＝3分の1）……58
第33図　調査2区遺構外出土遺物実測図（6）（S＝3分の1）……59
第34図　調査2区遺構外出土遺物実測図（7）（S＝3分の1）……60
第35図　調査3区出土遺物実測図（1）（S＝3分の1）……62
第36図　調査3区出土遺物実測図（2）（S＝3分の1）……63

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧……13

写　真　図　版

写真1　上木原遺跡遠景（南より）
写真2　上木原遺跡遠景（北より）
写真3　S－002完掘状況（南西より）
写真4　S－003弥生土器出土状況

写真5　S－002より天草灘を望む……75
写真6　S－002遺物出土状況……75
写真7　S－002遺物出土状況……75

写真８　Ｓ－003完掘状況（北より）……76
写真９　Ｓ－003遺物出土状況（西より）……76
写真10　Ｓ－003遺物出土状況（壷・甕）……76
写真11　Ｓ－003遺物出土状況 ……77
写真12　Ｓ－003遺物出土状況（甕脚部・鉢）……77
写真13　調査２区石器出土状況（敲石）……77
写真14　出土土器（1）……78
写真15　出土土器（2）……79
写真16　出土土器（3）……80
写真17　出土土器（4）……81
写真18　出土土器（5）……82
写真19　出土土器（6）……83
写真20　出土土器（7）……84
写真21　出土石器及び周辺地区表採の石器……85
写真22　周辺地区表採の石器……86

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

熊本県農政部より羊角湾周辺地区中山間地域総合整備事業（木原工区）に伴い、事業予定地内の埋蔵文化財有無の照会があり、事業予定地内に遺跡の所在が指摘されていたことにより、平成11年度に熊本県文化課によって試掘調査が実施された。その結果、事業予定地内において遺跡が存在する可能性のあることが確認され、県農政部と県文化課が協議した結果、発掘調査を実施することとなった。

熊本県農政部は、天草町教育委員会に本調査を依頼された。平成13年６月21日付で文化財保護法57条の３による埋蔵文化財発掘の通知を受け、天草町教育委員会は、熊本県文化課の「埋蔵文化財確認調査報告書」を基にして発掘調査予算を計上、平成13年６月25日付で発掘調査資料を提出した。本調査受託のための実施協定書は県農政部が作成し、県農政部と天草町教育委員会で協議の上、平成13年７月27日付けで協定を締結し本調査を実施することとなった。

また、試掘調査時には熊本県遺跡地図上で「下木原遺跡」として登録されていたが、実施協定締結前に遺跡所在地が下木原ではなく上木原に所在することが判明し、熊本県文化課と協議のうえ、遺跡名を「下木原遺跡」から「上木原遺跡」へと変更した。

第２節　調査の経過

本調査は平成13年８月20日から同12月27日まで、約４ヶ月間実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成13年７月23日	熊本県教育庁文化課文化財保護主事山下義満氏による調査指導（表土掘削立ち会い）
平成13年８月20日	発掘調査開始、３区から調査を始める。
平成13年９月12日	３区調査終了、２区調査開始
平成13年９月28日	熊本県教育庁文化課高谷和夫参事による調査指導
平成13年10月22日	１区調査開始
平成13年10月24日	町文化財保護委員深池敏和氏来跡、見学
平成13年11月９日	別府大学下村　智助教授による調査指導
平成13年11月13日	町長・助役・町役場職員来跡、見学
平成13年11月16日	空中写真撮影
平成13年11月17日	現地説明会開催
平成13年11月18日	別府大学下村　智助教授、学生を連れて来町、調査指導及び見学
平成13年11月19日	午前、熊本県天草地域振興局、天草町農林水産課、教育委員会生涯学習課による現地協議
平成13年11月19日	午後、熊本県教育庁文化課帆足俊文学芸員による調査指導

平成13年11月30日　発掘調査実施協定の変更契約締結（調査期間の延長）

平成13年11月30日　遺構実測等業務委託契約の一部変更契約締結（契約期間の延長）

平成13年11月30日　１区調査終了

平成13年12月１日　調査１区・３区埋め戻し作業開始

平成13年12月27日　２区調査終了

平成14年１月７日　調査２区埋め戻し作業完了

平成14年１月９日　上木原遺跡発掘調査概要報告書を天草地域振興局に提出

第３節　調査の方法（第１図・第２図）

調査地は現状でジャガイモ畑として利用されていたが、作付けしていない畑等もあったため、まず調査区周辺の草払い作業を実施した。その後、バックフォーによる表土剥作業を実施した。

次に、調査区の土層確認を目的として調査区端に0.5m×２mのトレンチを８本設定し、掘り下げ・土層堆積状況の確認を行った。また、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託して10m×10mの調査グリッドを設定した。調査面積は調査１区156㎡、調査２区1286㎡、調査３区707㎡、計2149㎡である。

測量図の作成は、地形測量図の縮尺を1／200とし、等高間隔線は25㎝で作成した。検出した遺構、土層の実測図は1／20の縮尺で行った。地形測量図および遺構・土層実測図は㈱埋蔵文化財サポートシステムに業務委託した。

調査時の写真撮影は、35㎜のリバーサルおよびモノクロフィルムによる撮影を行った。

第４節　調査組織

天草町教育委員会では下記のとおりの体制で発掘調査を実施した。

平成13年度（2001）現地調査

調査主体	天草町教育委員会	
調査責任者	天草町教育長	小出　昌廣
調査事務局	生涯学習課	
	課　長	平山　忠則
	主　幹	有田　義男
	（文化・スポーツ係長）	
調査担当	学芸員	松本　博幸
発掘調査作業員	有村　晃　有村　直樹　上田　泉　江浦　晴子　尾下　敏則	
	川口　末喜　木本　孝　斉藤　幸子　椎葉　修一　白石　富男	

須崎　ゆり　田原富喜恵　中田　美幸　長尾　力夫　西岡　恒隆
二ノ宮利喜夫　二ノ宮義徳　浜田　秀美　本多　恒美　本多　勇人
松岡　要子　丸谷　公昭　山口　義人　山田　幸男

平成14年度（2002）整理作業・報告書作成

調査主体　天草町教育委員会

調査責任者　天草町教育長　小出　昌廣

調査事務局　生涯学習課

課長　平山　忠則

主幹　有田　義男

（文化・スポーツ係長）

整理作業・報告書作成担当

学芸員　松本　博幸

整理作業員　江浦　晴子　斉藤　幸子　須崎　ゆり　本田　恒美
浜田　秀美　松岡　要子

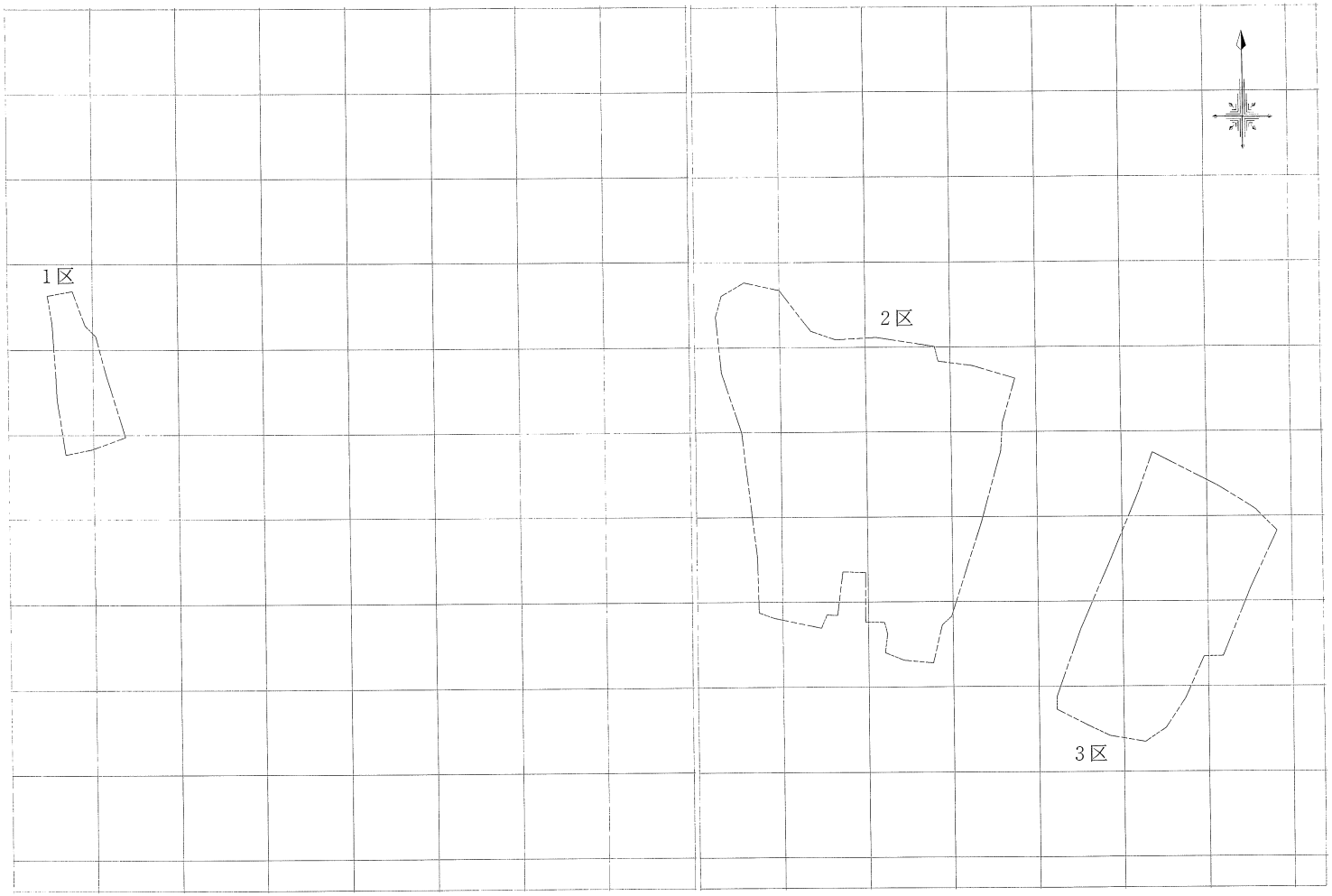
調査指導・協力者（平成13・14年度、敬称略、順不同）

下村　智（別府大学）　高谷　和夫　坂田　和弘　山下　義満　長谷部　善一
帆足　俊文　上高原　聡　須崎　明子（以上　熊本県教育庁文化課）
松本　教夫　深池　敏和（以上天草町文化財保護委員）

地権者

岩崎　久喜　大平　伝市　木本　政幸　竹口　スミノ　竹林　忠夫　竹本　和規
松上　貞継　森口　桂一郎　山下　広造　山本　正男

第１図　上木原遺跡周辺地形図



第2図　調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

上木原遺跡の所在する天草町は、熊本県の南西部に位置し、東経130°35′36″、北緯32°52′08″の地点にあり、東シナ海、有明海、不知火海に囲まれた天草諸島のなかで、天草下島の最西部に位置する。北は苓北町、東を本渡市、南を河浦町・牛深市と境を接する。町域は東西6.6km、南北20kmの総面積84.17平方キロメートルである。

町の地勢は、山地が海に迫っており耕地面積が町総面積の11.6％にすぎず、特に水田地は3.9％という低さである。町面積の約７割を山地が占めており、矢筈岳・十三野山、鬢の水山、天竺山の四山系を南北に結ぶ線を頂点として、西南に急傾斜に拓けた土地である。集落は山間部の福連木を除いて、西海に面する平坦部に位置する。耕地の大部分は山脈の傾斜に沿い階段状に点在し、主要河川は北部に下津深江川、中部に高浜川、南部に大江川があるが、いずれも四山系から発し西流して天草灘に注いでいる。昭和31年９月21日の合併により旧福連木・下田・高浜・大江の４か村が合併して現在の天草町にいたっている。

上木原遺跡は、天草町域内南側、大江地区に所在する。大江地区と高浜地区の境界に位置する荒尾岳から南に延びる尾根上にあり、標高約90m～96mに位置している。天草灘に向けて広がる谷の上方、南向きの緩斜面に立地している。

第２節　歴史的環境（第３図、第１表）

上木原遺跡が所在する天草町大江周辺では、旧石器時代の遺跡は現在確認されていない。後述するが、上木原遺跡の調査で細石刃核が１点出土したことは、天草下島西海岸地帯では最も古い時期の資料として位置づけられるものであり、天草下島西海岸一帯での人類の痕跡が旧石器時代末期まで遡ることを示している。

縄文時代になると、羊角湾周辺地域である大江～河浦町一帯で遺跡数が急増する。その大半は表採資料等であるため未調査だが、主として石斧・石鏃等石器類が表採されているようである。上木原遺跡の東方に尾根筋を一つ隔てた地点（大江字里）には大江遺跡があり、安山岩製磨製石斧が１点表採されており貝塚の可能性が指摘されている。その更に東方の尾根上（大江字桑鶴）で頁岩製磨製石斧が1点表採されている。羊角湾沿いに河浦方面に向かうと、調査により縄文後期の埋甕が出土した仕山遺跡がある。現在確認されている遺跡の殆どは現在河浦町の中心集落が営まれている谷筋一帯に集中しており、貝塚が多く形成されているようである。また、天草町大江～河浦町間の今富・大河内の山間部地帯にも縄文時代の遺跡が存在する。

弥生時代の遺跡はこれまで殆ど確認されていない。羊角湾周辺地域のみならず、天草諸島全体で弥生時代の遺跡は少なく、遺構が発見された遺跡は無いという現状であり、上木原遺跡での住居跡の発見、集落遺跡の調査は天草で初めての事例である。従来、弥生時代における天草島は、米を主体とした農耕生活が可能な沖積平野が少ないという地形的要因があるため、生活

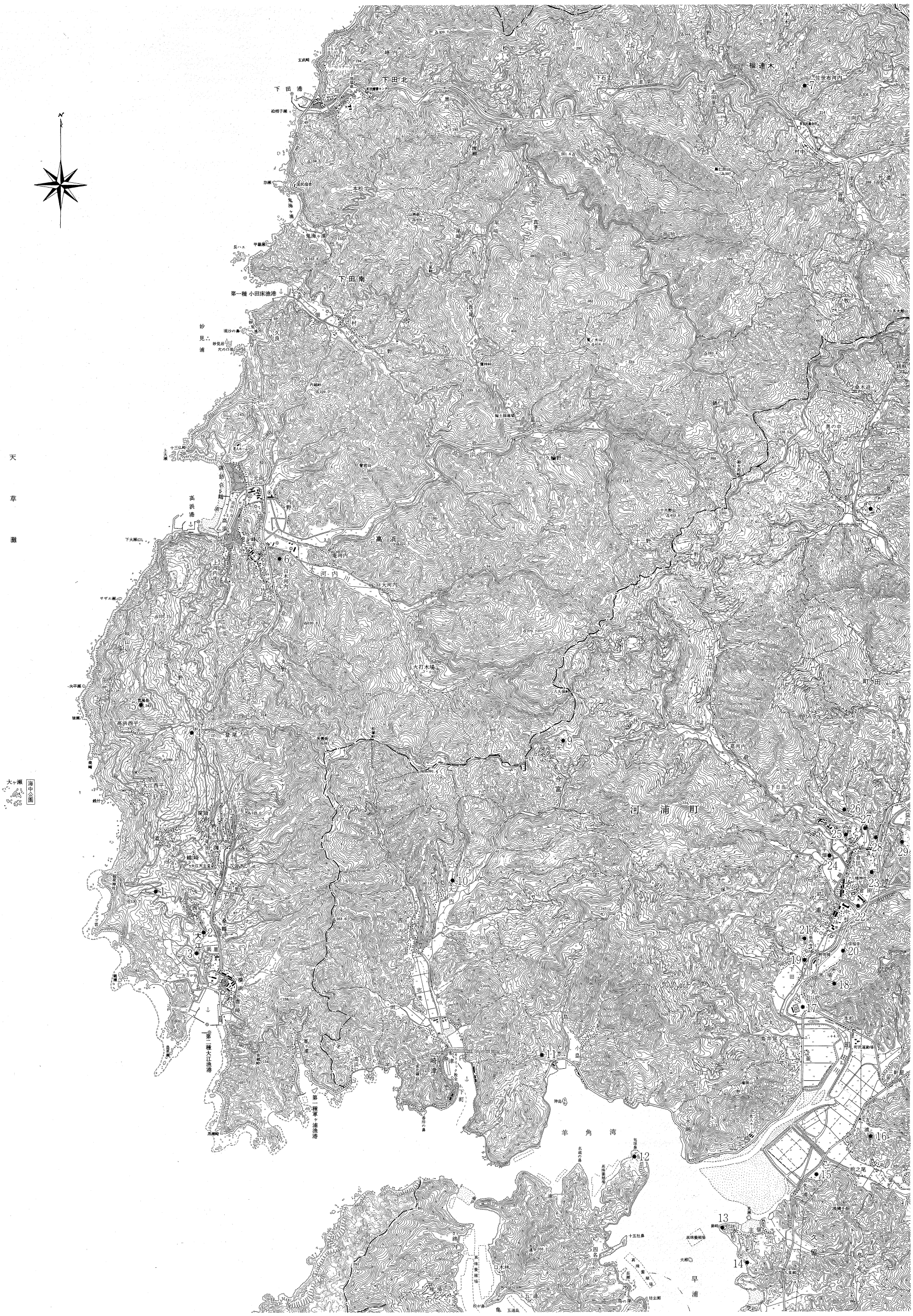
に適さない事から遺跡数が減少すると考えられてきたが、標高90m以上の高地、山上に集落が営まれているという事実は、従来の弥生時代遺跡の立地条件に対する見解を再考余儀なくさせるものであり、今後天草における弥生時代遺跡の立地を考えるうえで非常に重要な意義を持つといえる。

古墳時代になると、再び遺跡数は増加し、羊角湾周辺で古墳の築造も見られる。河浦町今高の鬼塚古墳はその代表例で、発掘調査により円墳であることがわかり出土品は町指定文化財に指定されている。また、河浦町上馬場の馬場遺跡では時期不明であるが土師器・須恵器が表採されている。

中世になると、天草五氏の1人である天草氏の居城と言われる、河内浦城・下田城が築かれる。そのうち、河内浦城は発掘調査により掘切、掘立柱建物跡２棟が確認されている。この時期天草町には福連木・高浜・大江に城が築かれる。福連木字山の神には福連木城、高浜森分には高浜城、大江城の尾・陣の内には大江城跡（推定地）があり、谷を隔てた武装山山上と敵・味方別れて陣取り戦をしたという伝説が残っている。

近世では、高浜村庄屋上田家によって天草陶石の採掘・利用が行われ、伊万里の職人を迎えて高浜焼がはじめられた。その高浜焼窯跡が、高浜皿山に残されている。連房式の登り窯であり、焼成室一つ一つが３～４ｍある大きな窯跡である。当初７基あったとのことであるが、倒壊により、現在は４基が残されているのみである。また、上木原遺跡の北方、荒尾岳山上には江戸時代異国船取締り・海岸防備を目的として設置された遠見番所跡がある。

近世天草は天領であり、またキリシタン・隠れキリシタンと呼ばれる人達が暮らしていた地である。特に天草町大江、河浦町崎津・今富は隠れキリシタンが多かったことで有名である。そのためキリシタン遺跡は数箇所伝えられており、上木原遺跡の北方、大江尾露の窪に隠れキリシタン信仰の地と伝えられる祈りの塚がある。



第 3 図　周辺遺跡地図

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種 別	指定	備　　考
1	上木原	大江　上木原	弥生	集落跡		
2	大江	大江　里	縄文	包蔵地		貝塚か、石斧出土
3	大江城跡	大江　城の尾・陣内	中世	城		
4	祈りの塚	大江　尾露の久保	近世	墳墓	町	
5	荒尾岳遠見番所跡	高浜　荒尾岳	近世	包蔵地	町	
6	高浜城跡	高浜　森分	中世	城		
7	高浜焼窯跡及び灰原	高浜　皿山	近世	生産	県	県指定、江戸時代連房式登り窯
8	福連木城跡	福連木　山の神	中世	城		
9	茶園原	今田　茶園原	縄文	包蔵地		石器多数、石族70
10	大山	今富　大山	縄文	包蔵地		
11	大川内	今富（通称大川内）	縄文～中世	包蔵地		
12	仕山	今高　小島・仕山	縄文	包蔵地		縄文後晩期土器・石鏃
13	鬼塚古墳	今高　鬼塚	古墳	古墳	町	円墳、出土品町指定
14	鬼塚古墳	主留　鼻崎	古墳	古墳		
15	主留海岸	主留	縄文	包蔵地		
16	水ノ浦貝塚	水ノ浦	縄文・弥生	貝塚		
17	九浦	久富　九浦	縄文～中世	包蔵地		
18	丸山	河浦　丸山	古墳～中世	包蔵地		
19	下田城	河浦　城山	中世	包蔵地		
20	妙見	河浦　妙見	縄文	包蔵地		石斧出土
21	馬場	河浦　上馬場	古墳～中世	包蔵地		須恵器・土師器
22	河内浦城跡	河浦　湯立免	中世	城		
23	天草学林の跡	河浦　木場口	中世	包蔵地		推定地
24	一町田八幡宮貝塚	河浦　官有地	歴史	貝塚		
25	平畑貝塚	河浦　平畑	縄文	貝塚		
26	平野	河浦　平野	古墳～古代	包蔵地		
27	平野	河浦　平野	縄文	包蔵地		
28	小河内貝塚	河浦　小河内	縄文	貝塚		
29	折尾	河浦　折尾	古墳～古代	包蔵地		
30	段の原	河浦　段原	古墳～古代	包蔵地		

第１表　周辺遺跡一覧

第Ⅲ章　遺跡の概要と層位

第１節　遺跡の概要

上木原遺跡は天草町の南西部、天草町大江木原地区に所在する。荒尾岳から延びる尾根上標高約90～96mに位置する。遺跡を含め、尾根筋上周辺一帯は畑地（じゃがいも畑）として利用されており、地元では通称「木原団地」と呼ばれているが、いつの時代から利用され始めたのか定かではない。

遺跡は、南に向かって伸びる尾根上の比較的広範な緩斜面の一角にあり、住居跡と溝遺構が確認された。住居跡からは土器・石器が出土し、出土遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。溝遺構は、数回にわたる作り替えを行いながら利用されていたものであるため時代幅があり、出土遺物から判断すれば近世～近代にわたると考えられる。

また、包含層中から多量の土器・石器が出土し、弥生時代後期～古墳時代前期の物と考えられる土器が出土した。しかし、大半は磨耗が激しく、現在の地形が形成される過程において遺跡上方からの流れ込みや、畑地形成及び耕作作業による撹拌を受けていることに起因すると考えられる。

第２節　遺跡の基本層序

遺跡が緩斜面上に位置しているため、また、耕作による包含層上部の削平によって、土層は地点によって堆積状況は若干異なるが、基本的な層位は以下に示すとおりである。

第Ⅰ層　表土層

耕作土である。

第Ⅱ層　黒色土

黒色を呈する弱粘質土。粒子は粗くしまりが弱い。本遺跡における遺物包含層である。畑耕作により削平を受けており堆積状況は各所で異なるが、最も厚く堆積している地点で約50cmを測る。

第Ⅲ層　黄燈色土

天草下島地域の基盤層となる土で、雲母片岩の小礫・礫片を含む弱粘質土である。調査１区において、この層の最上部から石器が数点出土している。また、調査３区においても１区同様、石器が出土している。

第Ⅳ章　調査とその成果

第１節　調査１区の調査成果

(1) 旧石器時代～縄文時代の遺物（第４図１，２）

旧石器時代～縄文時代の所産と思われる石器が２点出土した。２点ともに１区内南側の地点で、基本層序Ⅲ層にあたる黄燈色土層上部から出土した。

１は使用痕剥片である。厚みのある縦長薄片を使用し、背面から剥離された箇所の縁辺に使用痕が確認される。また、背面には一部礫面を残す。長さ3.7cm、幅1.7cm、厚さ1.2cm。石材はチャートを利用している。２はスクレイパーである。上辺・下辺にそれぞれ腹面・背面両方からの剥離により刃部を作り出している。長さ4.5cm、幅4.3cm、厚さ0.7cm。石材は粘板岩を利用している。

(2) 弥生時代後期～終末期の遺構と遺物（第５図～13図）

調査１区で竪穴住居跡を１基確認した。以下に、以降の概要と出土遺物を記す。

Ｓ－003（第６図、第７図）

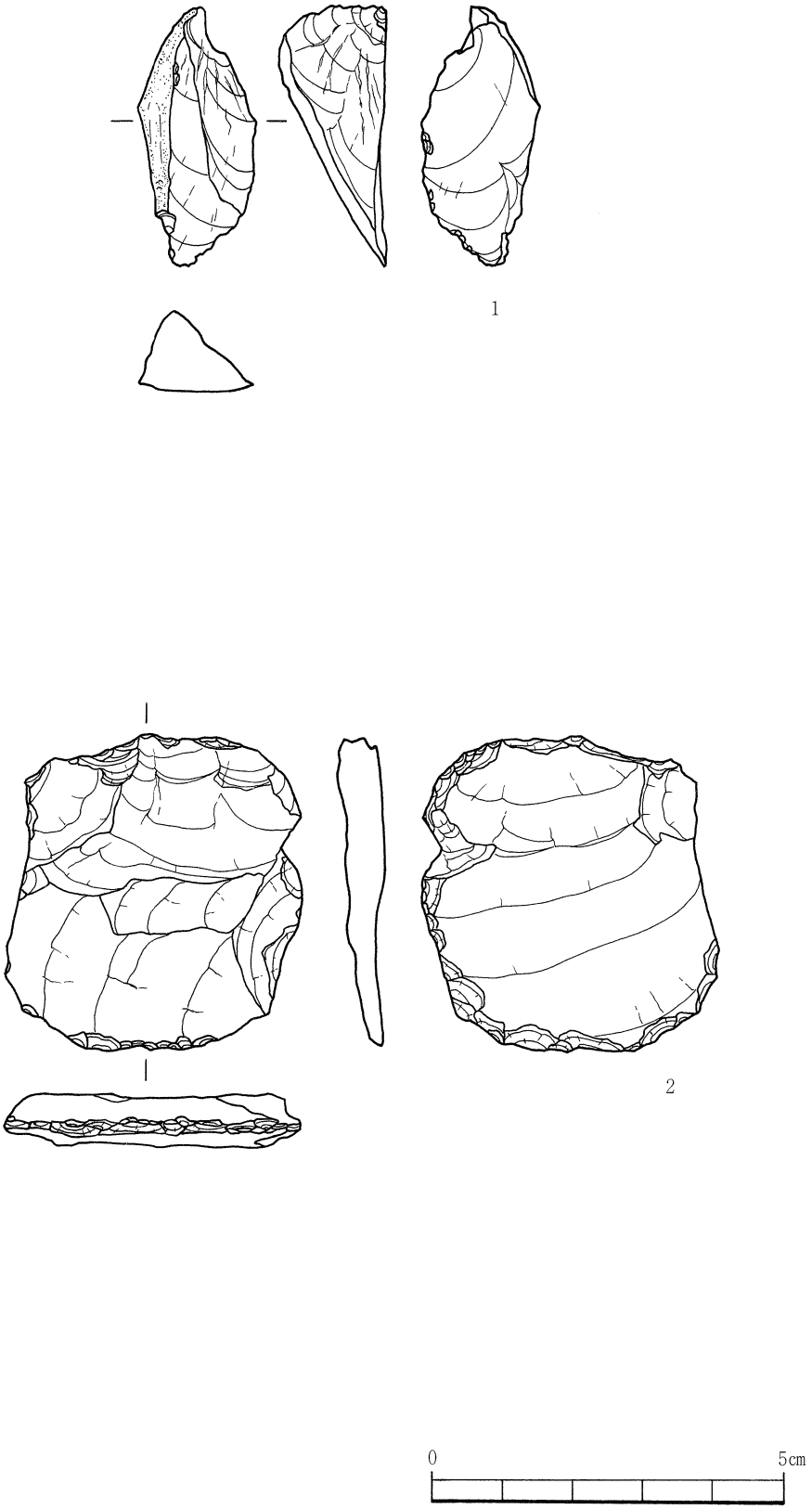
竪穴住居跡である。調査１区南側で確認した。西側を現在の農道建設、南側を畑の造成によって削平されており、遺構の形は完全な形で確認できなかったが、現状で円形あるいは隅丸方形の形を成すと思われる。残存部で6.42m×6.90m、深さは遺構確認面から最大で0.66mを測る。２段の階段状に作られていることが確認された。遺構中から土器・石器が出土しており、出土遺物から弥生時代後期後半～終末期にかけての時期の遺構と判断される。

出土遺物－土器－（第８図～第11図）

Ｓ－003出土土器のうち、甕形土器６点、壷形土器11点、高坏形土器４点、低脚坏２点、鉢形土器３点、計26点を図化した。

３～８は甕形土器である。３は長く伸びる胴部に内湾する口縁部を持ち、口縁端部はつまみあげにより平坦面を持つ。底部形状は不明。調整は器内外面ともに刷毛目である。口径21.2cm。４は胴部中位よりやや上に最大径を持つ長胴の甕形土器である。口縁部、底部ともに形状不明。調整は器内外面ともに刷毛目。５は甕形土器の肩部片である。頸部外面に粘土帯を貼り付け、斜め方向の刻み目を施す。調整は器外面叩きである。６・７・８は甕形土器の脚台部である。６は調整器内外面ともにナデ、脚台径11.0cm、器高7.2cm。７は内面に指頭圧痕のあとにナデ調整、脚内面に工具ナデの痕跡がある。８は内面工具ナデ、脚内外面ナデ調整である。

９～19は壷形土器である。９は、直口の壷形土器で、短くほぼ直立する口縁部に強く張る倒卵型の胴部を呈する。最大径を胴部中位よりやや上に持つ。底部は丸みを帯びた平底である。調整は器内外面ともに刷毛目。口径11.2cm、器高21.3cm。10は肩部に最大径を持ち、上方につまみあげたような短い口縁部を持つ。調整は内面刷毛目、外面は磨耗のため不明。口径13.3cm。



第４図　調査１区出土石器実測図

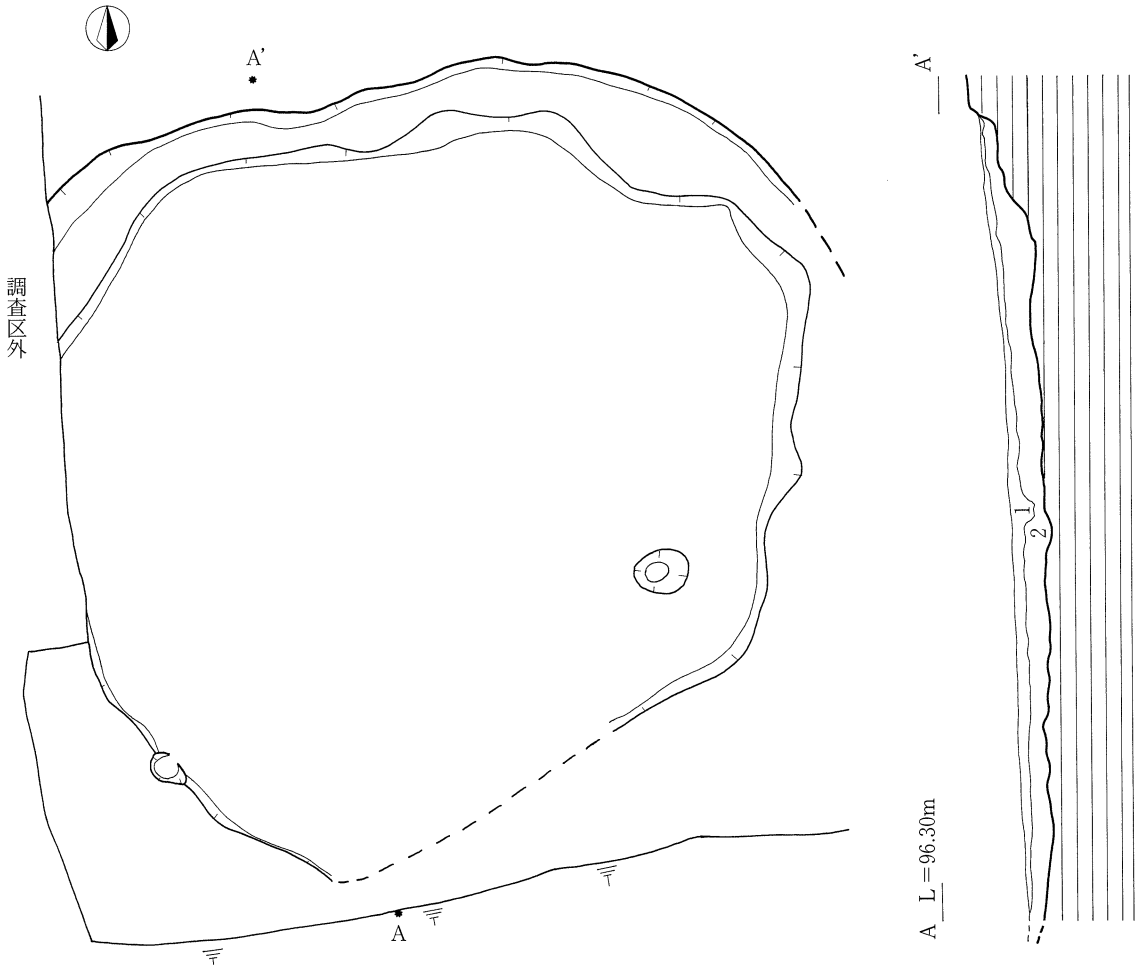
11は壷形土器の頸部～肩部である。頸部外面に突帯を貼り付けている。調整は器内外面ともに磨耗のため不明。12は広口の壷形土器である。強く張る倒卵型の胴部に丸底、外反しながら開く口縁部を呈する。最大径を胴部中位よりやや上に持つ。口縁端部は角張っており、刻み目を施す。調整は外面口縁部～胴部は刷毛目、内面胴部は刷毛目である。口径15.2cm、器高25.05cm。13は直口壷である。口縁部はやや外に開き、口縁端部は薄く仕上げる。胴部は強く張る。調整は外面肩部に刷毛目のあとナデ、胴部は刷毛目。内面は指圧痕が見られ、刷毛目を施している。口径11.3cm。14は直口壷である。口縁部はやや外側に開き、端部は角張っている。調整は外面肩部刷毛目、胴部に叩きを施す。口縁部および内面は磨耗のため不明。口径14.2cm。15・16は複合口縁の壷形土器である。15はいわゆる肥後型複合口縁壷で、口縁部外面に断面三角形の突帯を貼り付け複合口縁としている。口縁部内面は平坦である。口径23.4cm、器高5.0cm。16は胴部が強く張り、頸部で強くくびれて外反しながら開く口縁部、外面に突帯を貼り付け複合口縁を作り出している。口径18.0cm。この土器の特徴は特に口縁端部の形態、つまり複合口縁に最も良く表れている。これは熊本県内では類例が無く、南部九州の弥生後期様式に設定されている高付式（高三潴式併行）に特徴的に見られる形態であるが、口縁部内面にくぼみを持つ点等若干の差異も認められる。17～19は壷形土器の底部である。17はやや丸みを帯びた平底で、調整は内外面ともに刷毛目、底部内面に指頭圧痕を残す。18は17よりも更に底部径が小さくなり丸底に近い。内面に刷毛目を残す。底径4.0cm、器高7.6cm。19は器壁が厚く、底部形態は丸底である。調整は内面刷毛目、外面刷毛目、底部付近は工具ナデを施している。

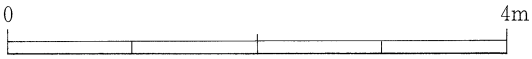
20～26は高坏形土器である。20は屈曲部からやや外反しながら直立気味に開く口縁部、口縁端部は内傾する平坦面を持ち、坏部は浅め、屈曲部外面に断面M字状突帯を貼り付けている。脚部は欠損しており不明。調整は口縁部内外面ともにナデ、坏部は内外面刷毛目である。口径31.0cm。熊本県内に類例資料は無く、16の複合口縁壷同様、高付式土器期の高坏形土器に類似している。しかし、口縁端部形状および屈曲部外面突帯の有無という点で差異が見られる。21は外反しながら大きく開く口縁部と浅い坏部を呈する。調整は内外面とも磨耗のため不明。口径35.4cm。22は屈曲部の断片資料である。調整は磨耗のため不明。23は脚裾部の資料である。円形孔を３個穿っている。調整は磨耗のため不明。脚部径14.2cm、器高3.8cm。

24～26は低脚の高坏形土器である。24・25は脚部のみで坏部形態は不明。24は脚柱部が無く裾部から坏部へと移行するようである。調整は外面刷毛目、ナデ。内面は刷毛目、ナデ、工具ナデ。25は中実の脚柱部から裾部へと緩やかに広がる。調整は内面ナデ、外面刷毛目。26は坏底部から脚部の資料で、器壁は薄く作られている。坏部は椀形を呈すると思われる。調整は内外面とも磨耗のため不明。

27・28は鉢形土器である。27は口縁端部をつまんであり、内傾する平坦面を持つ。調整は内外面ともに刷毛目。28は胴部から屈曲して、外反しながら開く口縁部を持つ。調整は外面口縁

第５図　調査１区遺構配置図





1．暗褐色土層。わずかに粘性を有する。雲母片岩の礫を多量に含む。
2．暗黄褐色土層。粘性を有する。雲母片岩の礫を含む。

第６図　Ｓ－003実測図

第７図　Ｓ－003遺物出土状況図

部ナデ、胴部刷毛目。内面は口縁部刷毛目、胴部指頭圧痕、工具ナデ。

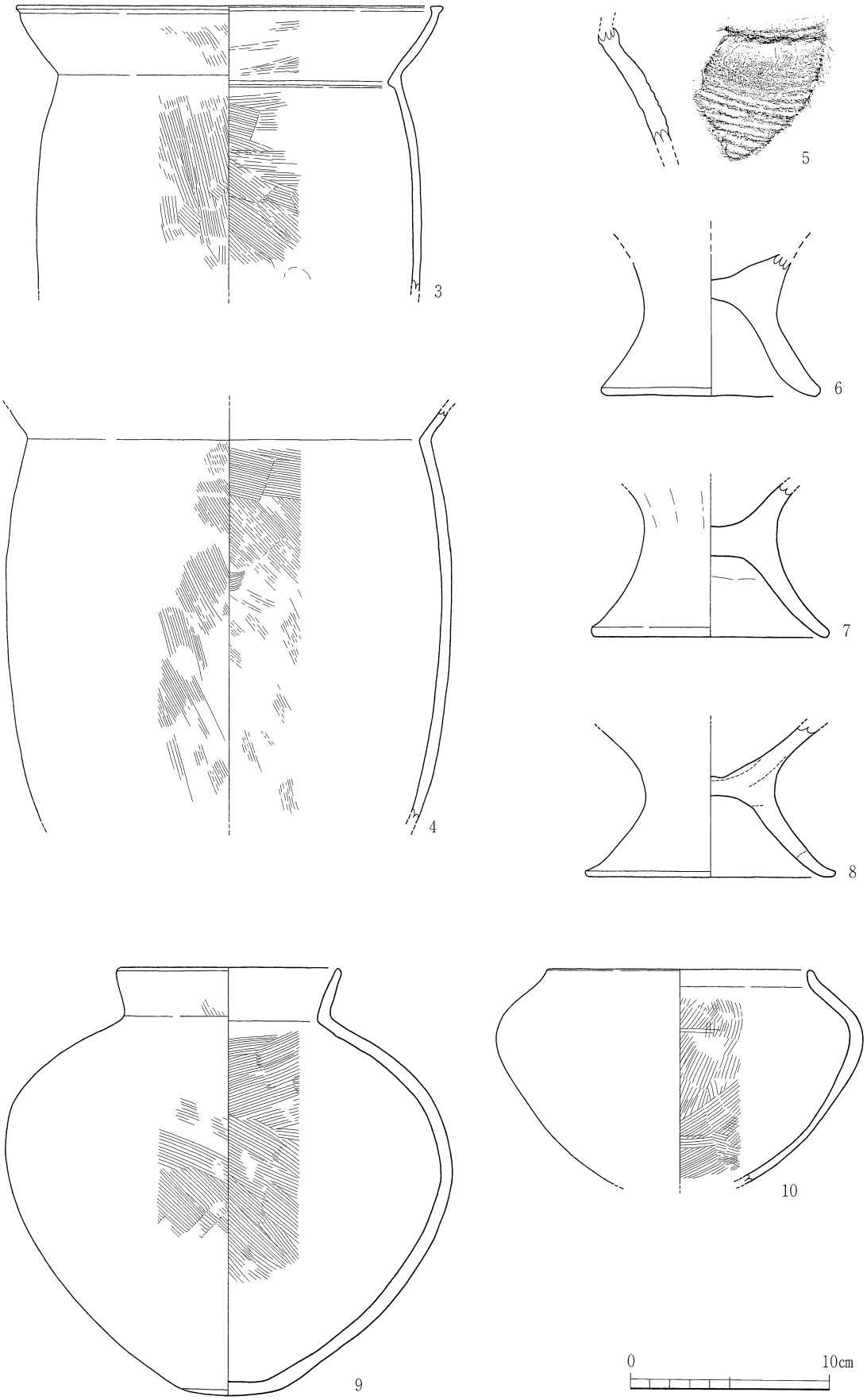
出土遺物ー石器ー（第12～13図）

Ｓ－003からは、石器が８点出土した。

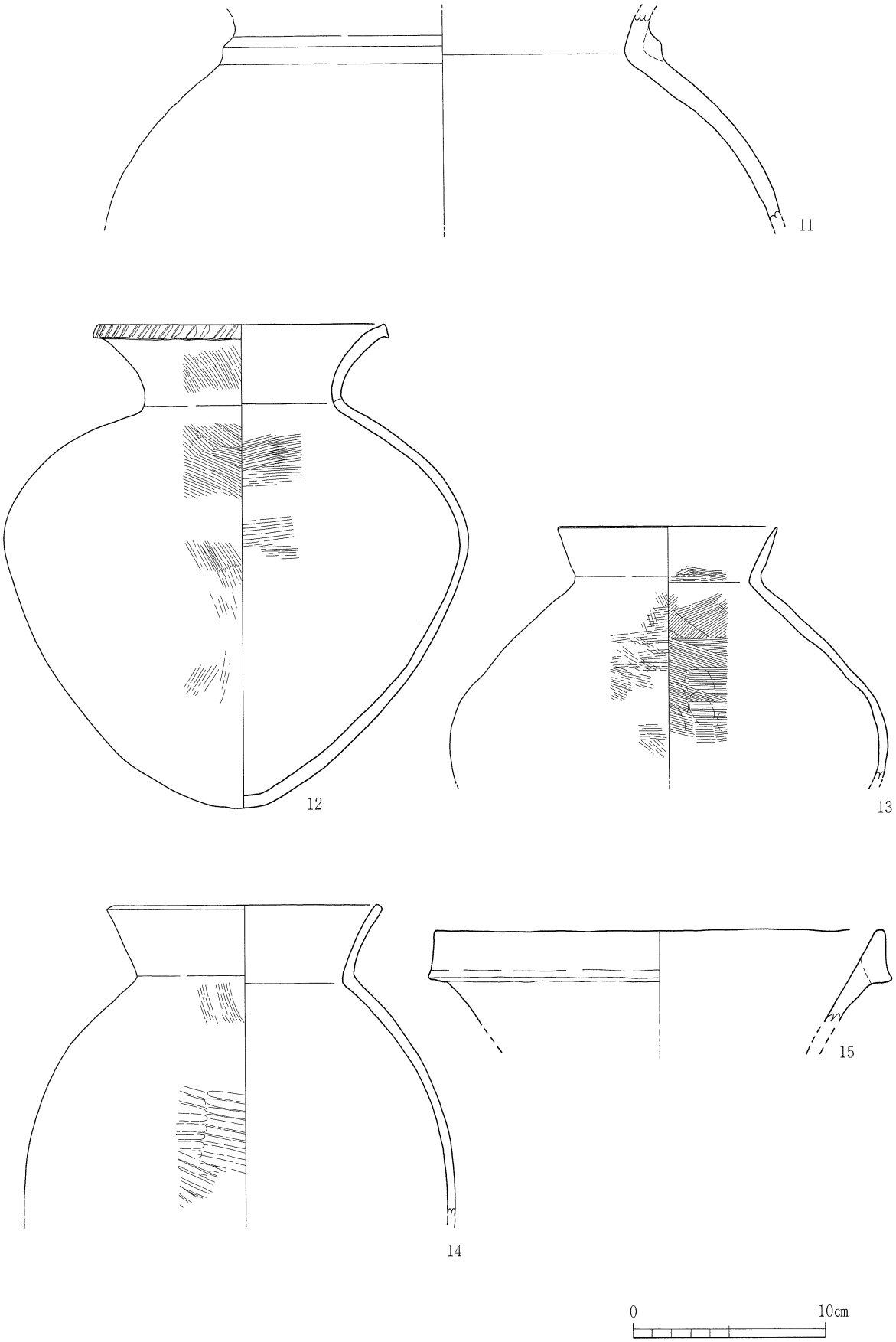
29、31～34は敲石である。29は敲石である。表裏面と周縁部に敲打痕を残す。特に表面には敲打による窪みが顕著に見られる。石材は砂岩。31は敲石である。細長い乳棒状を呈している。上面・下面に敲打痕を残す。石材は砂岩を使用。32は敲石である。細長い乳棒状を呈す。上面に敲打痕を残す。下面に剥離があり、使用時敲打による剥離と思われる。石材は砂岩を使用。33は敲石・磨石である。掌大の扁平な円礫を利用している。周縁部に敲打痕を残す。石材は砂岩。34は敲石である。拳大の円礫を利用している。３箇所に敲打痕を残す。石材は砂岩を使用。35は敲石・磨石である。側縁部と裏面に敲打痕を残す。表面は磨石として使用しており、摩擦痕を残す。石材は安山岩。36は砥石の断片である。側縁部に礫面を残す。石材は天草陶石。

(3) 遺構外出土の遺物（第14図）

出土土器３点を図化した。37は壷形土器の頸部～肩部の資料である。頸部はほぼ直立しており、肩部は強く張る。くびれ部には刻み目を施した粘土帯を貼り付け、肩部には波状文を施している。38は鉢形土器である。胴部は扁球形で、頸部でくびれ、口縁部は外側に開く。調整は口縁部内外面ともにナデ、胴部は外面刷毛目、内面工具ナデ、ナデ。39は壷形土器の底部である。底部形状は平底、調整は外面刷毛目、内面は磨耗のため不明。

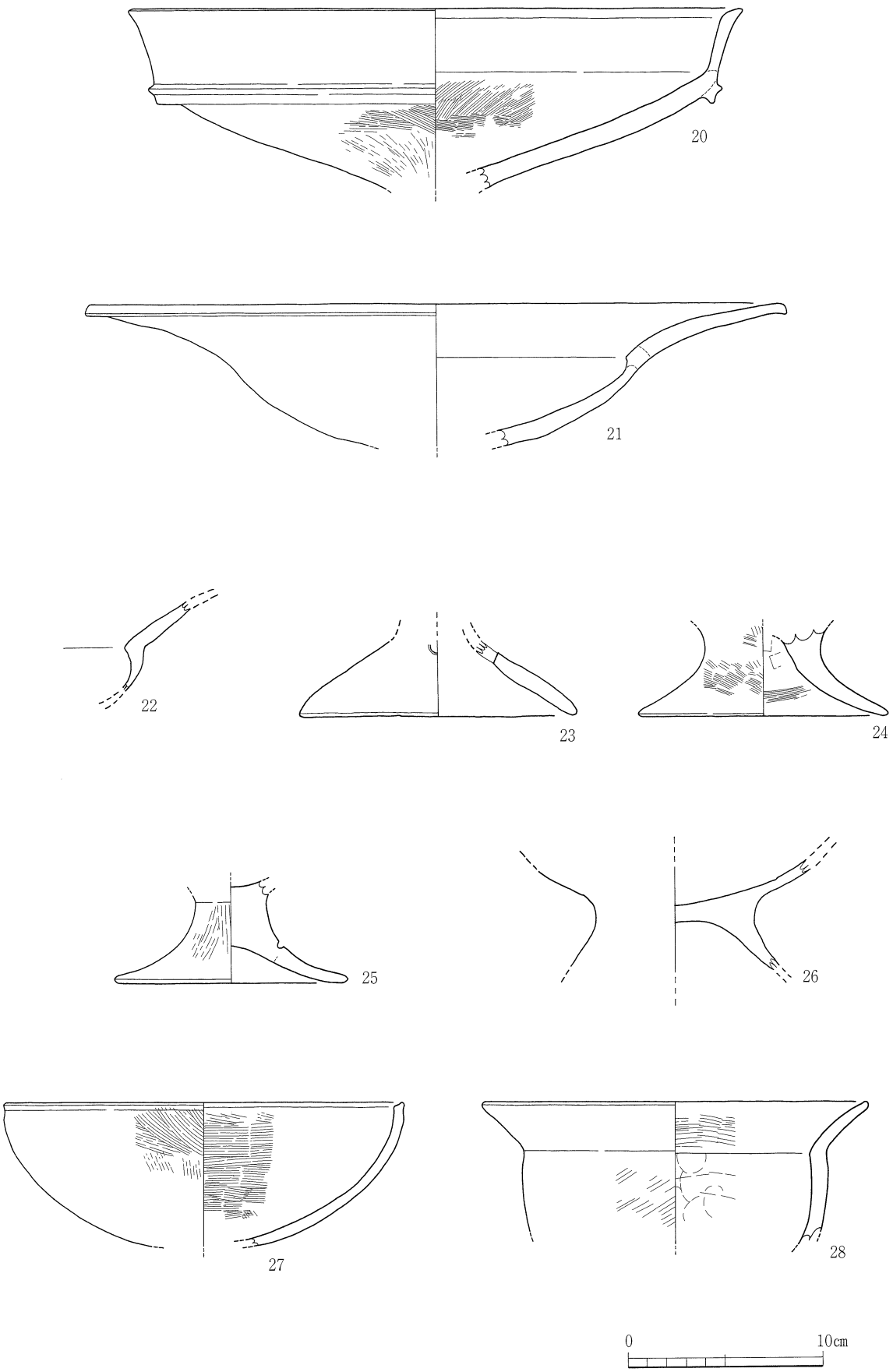


第８図　Ｓ－003出土遺物実測図（1）

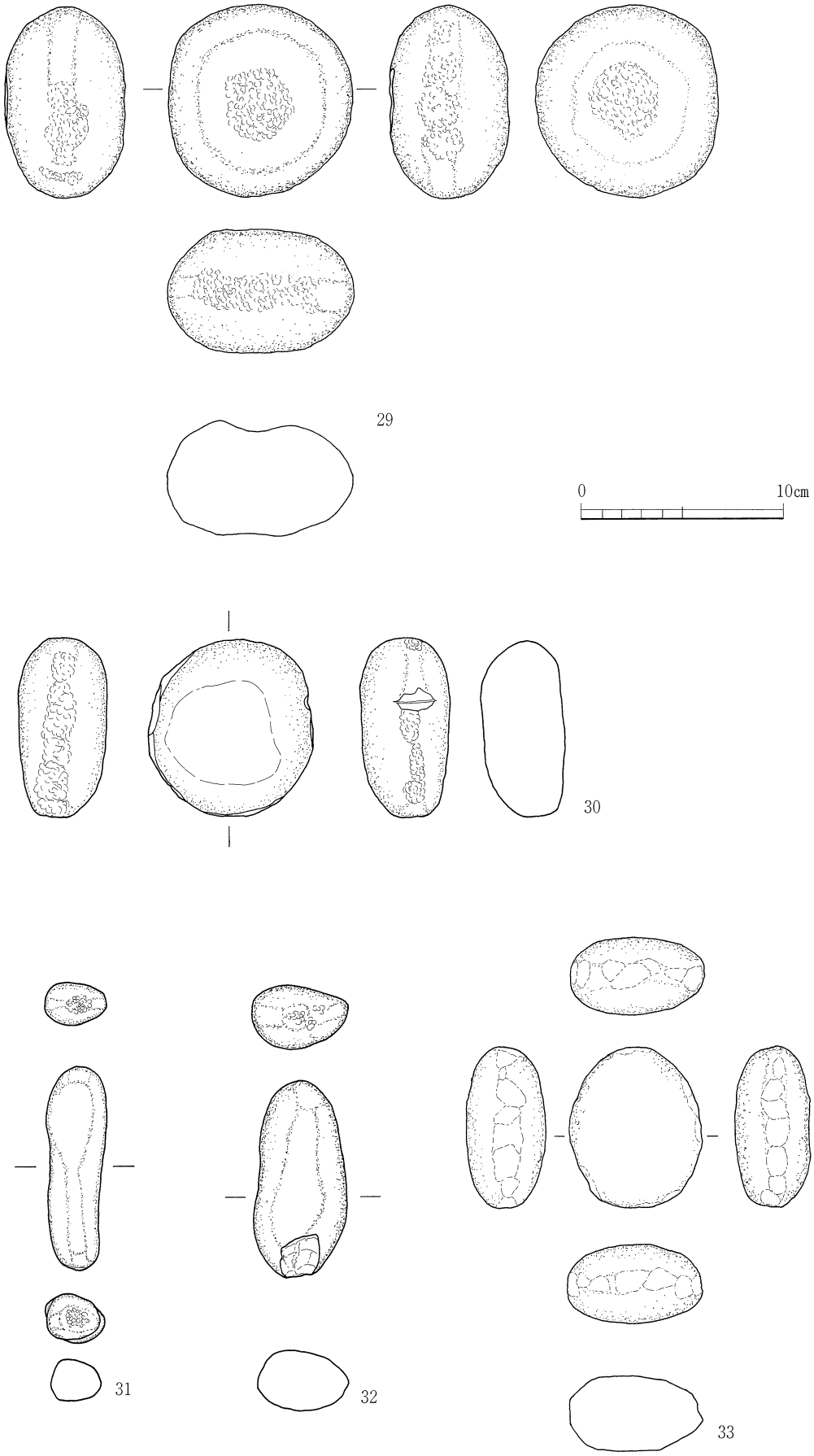


第９図　Ｓ－003出土遺物実測図（2）

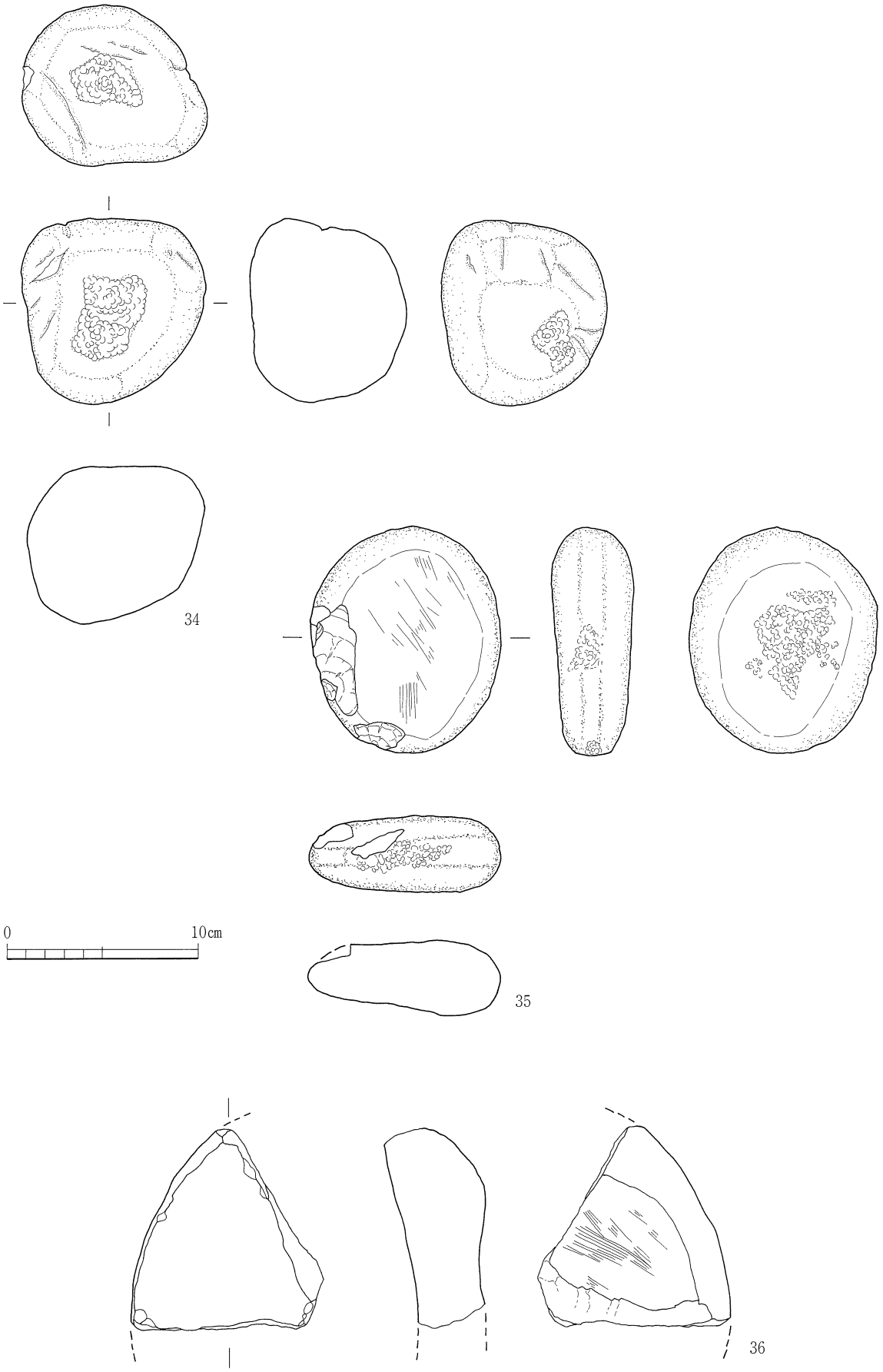
第10図　S－003出土遺物実測図（3）



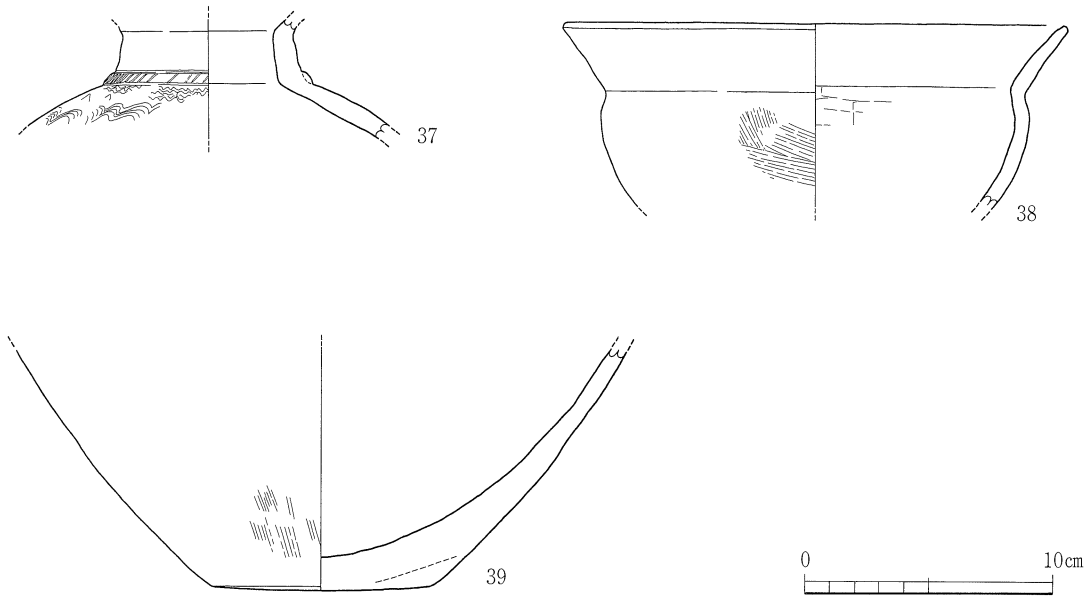
第11図　Ｓ－003出土遺物実測図（4）



第12図　Ｓ－003出土遺物実測図（5）



第13図　S－003出土遺物実測図（6）



第14図　調査１区遺構外出土遺物実測図

第２節　調査２・３区の調査成果

１　調査２区の調査成果

(1) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物（第15図）

調査２区では住居跡２軒、土坑２基、溝跡１条を確認した。以下、各遺構と出土遺物の概要を記す。

Ｓ－002（第16図、第17図）

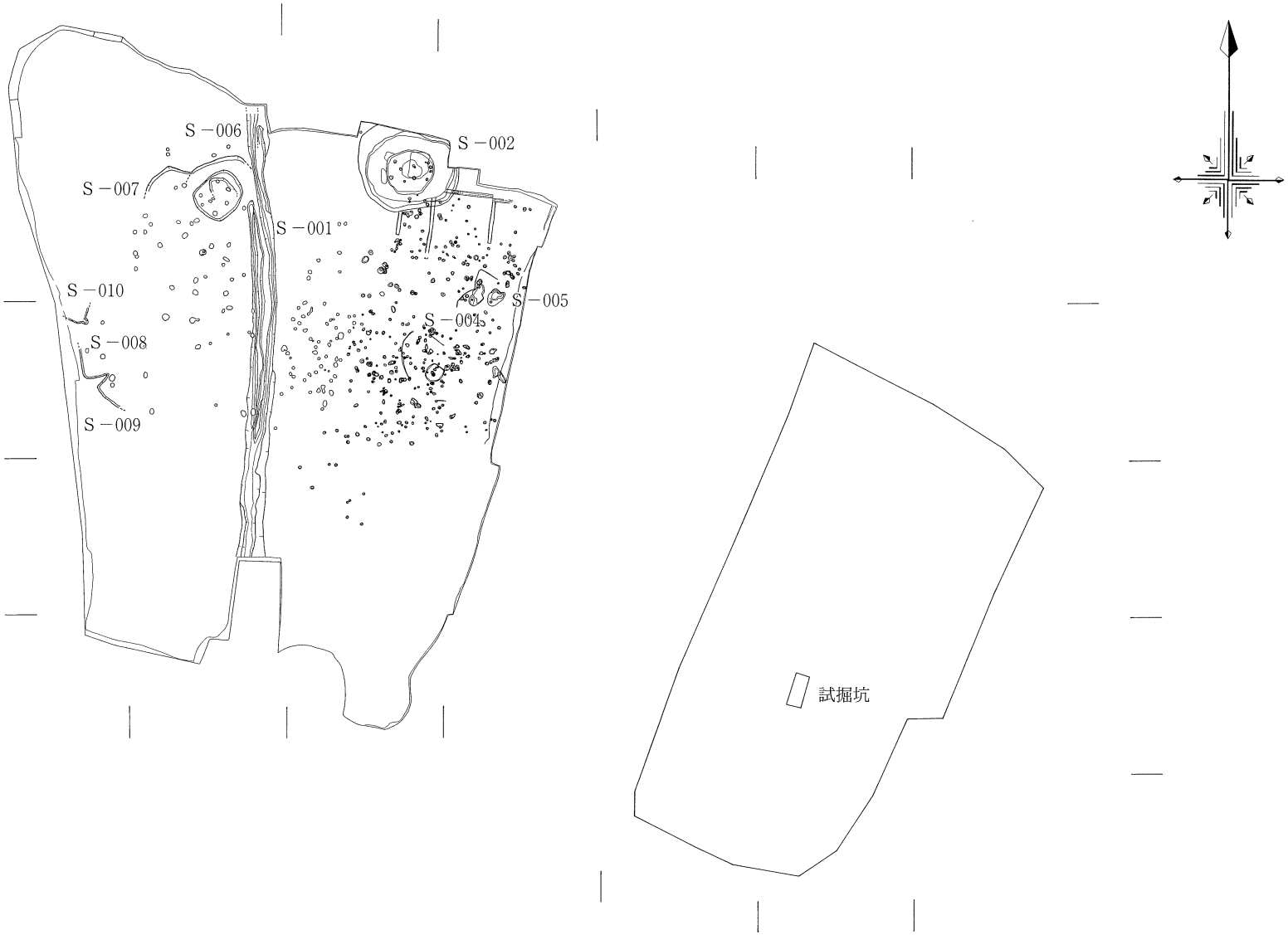
調査２区北側のほぼ中央よりの地点で確認した。平面形は不整形な円形を呈する竪穴住居跡である。遺構の北側部分は調査区外に延びており、遺構の全体を把握することはできなかった。柱は４本である。6.61ｍ×5.28ｍ、遺構の深さは検出面から最大で0.54ｍを測る。覆土中、上下２層に別れて炭化物の集中面が確認され、下層炭化物集中箇所の下部には焼土層も確認された。出土遺物から、弥生時代後期後半～終末期の時期の遺構と判断される。

出土遺物－土器－（第18図～第20図）

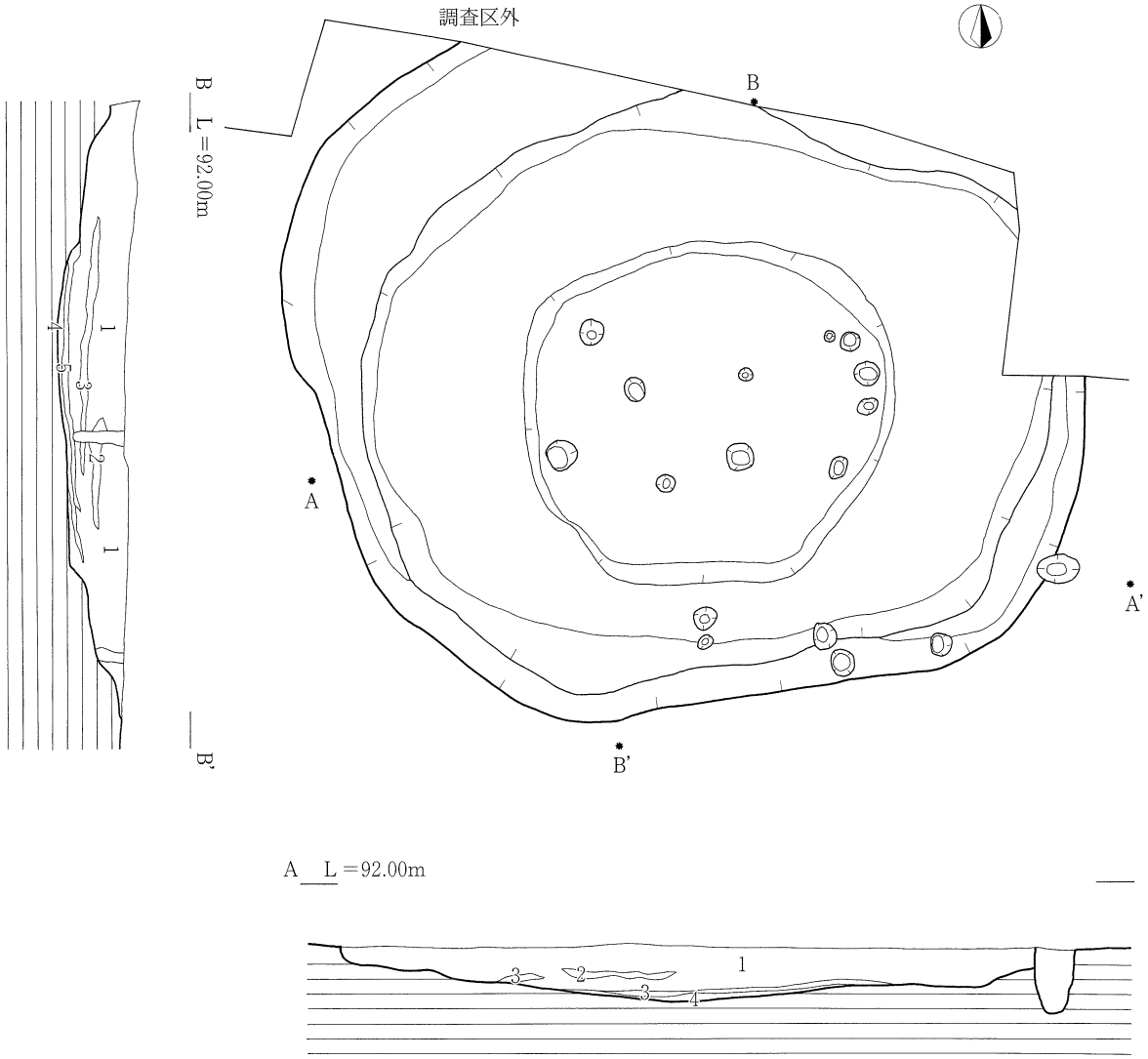
Ｓ－002出土土器のうち、甕形土器６点、壷形土器12点、高坏形土器９点、器台形土器１点、総点数28点を図化した。

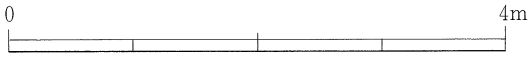
40～45は甕形土器である。40は小型の長胴甕で、くの字にくびれて口縁部へと達する。口縁端部は丸みを帯びた仕上げである。胴の中位～底部を欠損しており底部形状は不明。調整は口縁部内外面ともにナデ、胴部外面叩き、内面刷毛目である。口径23.8㎝、器高9.0㎝。41は口縁部のみの資料である。口縁端部を外側に向けてつまみ出している。調整は内外面ともにナデ。42は甕形土器の脚部である。調整は内外面ともに磨耗のため不明。43は甕形土器の底部である。長胴甕の底部であり脚が付くと想定される。調整は内外面ともに磨耗のため不明。44・45は甕形土器の口縁部の資料である。ともにくびれが弱く、内湾する口縁部を呈するが、口縁端部の整形に若干違いがある。44は端部を外側に向けてつまみ上げ、内傾面が凹状になっている。45は端部つまみ上げの点では同じだが、内傾面は平坦である。調整は44・45ともに口縁部内外面ナデ、肩部内外面刷毛目である。

46～57は壷形土器である。46は広口の壷形土器で、口縁部は外反しながら開く。口縁端部は角張っている。調整は内外面ともに刷毛目。47は複合口縁の壷形土器である。調整は口縁部外面ナデ、内面刷毛目。頸部内外面ともに刷毛目である。北部九州の弥生後期後半の土器様式である下大隈式土器に見られる複合口縁壷に類似している。48は口縁部外面に断面三角形の突帯を張り付け擬似複合口縁を作り出している、いわゆる肥後型複合口縁壷と呼ばれる資料である。調整は内面ナデ、外面口縁部ナデ、頸部刷毛目である。49は、袋状口縁を持つ壷形土器の口縁部断片である。調整は内外面ともにナデ。50は複合口縁の壺形土器である。肩部以下を欠いている。頸部から強くくびれ、口縁部は屈曲して直立する。端部は丸く仕上げている。調整はナ



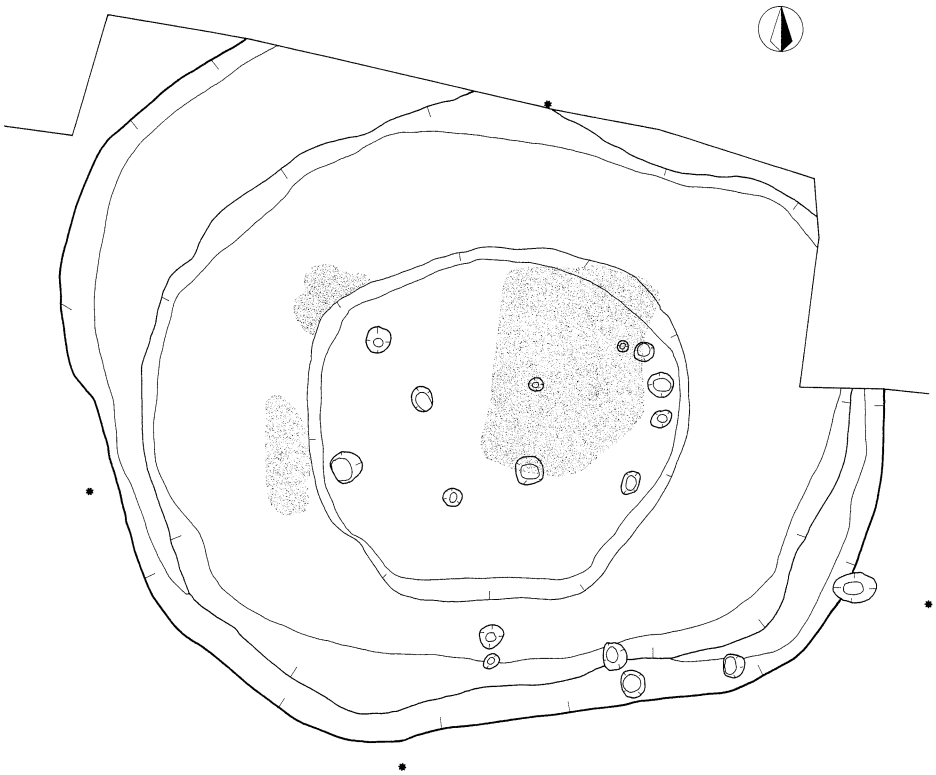
第15図　調査２区・３区遺構配置図

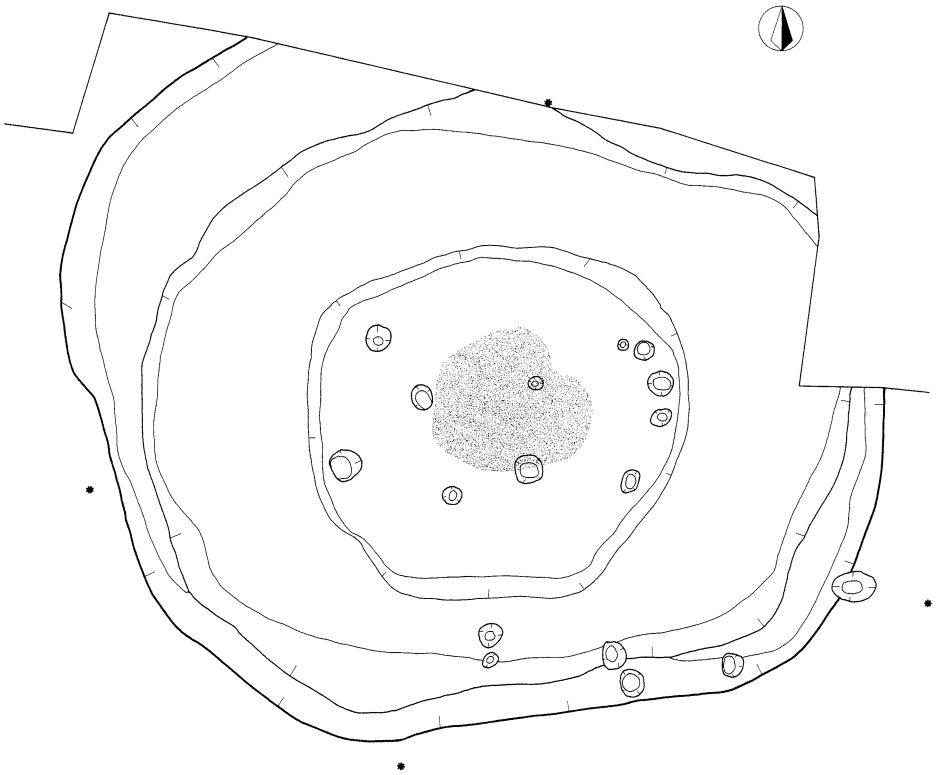




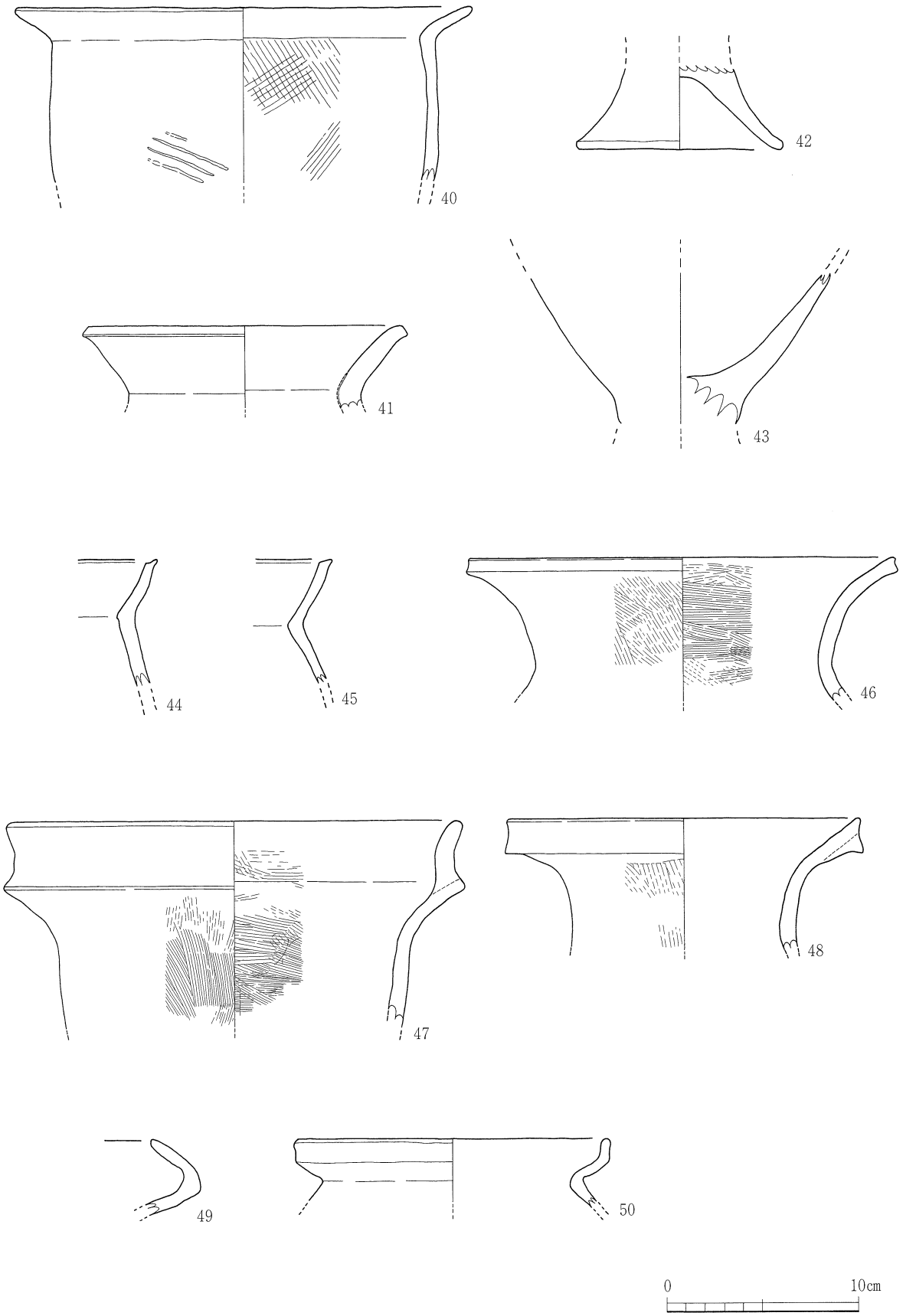
1．暗褐色土層。しまりがあり、雲母片岩等大小の礫を多量に含む。
2．灰褐色土層。炭化物を若干含む。
3．炭化物集中層。
4．焼土層。
5．炭化物集中層。

第16図　S－002実測図

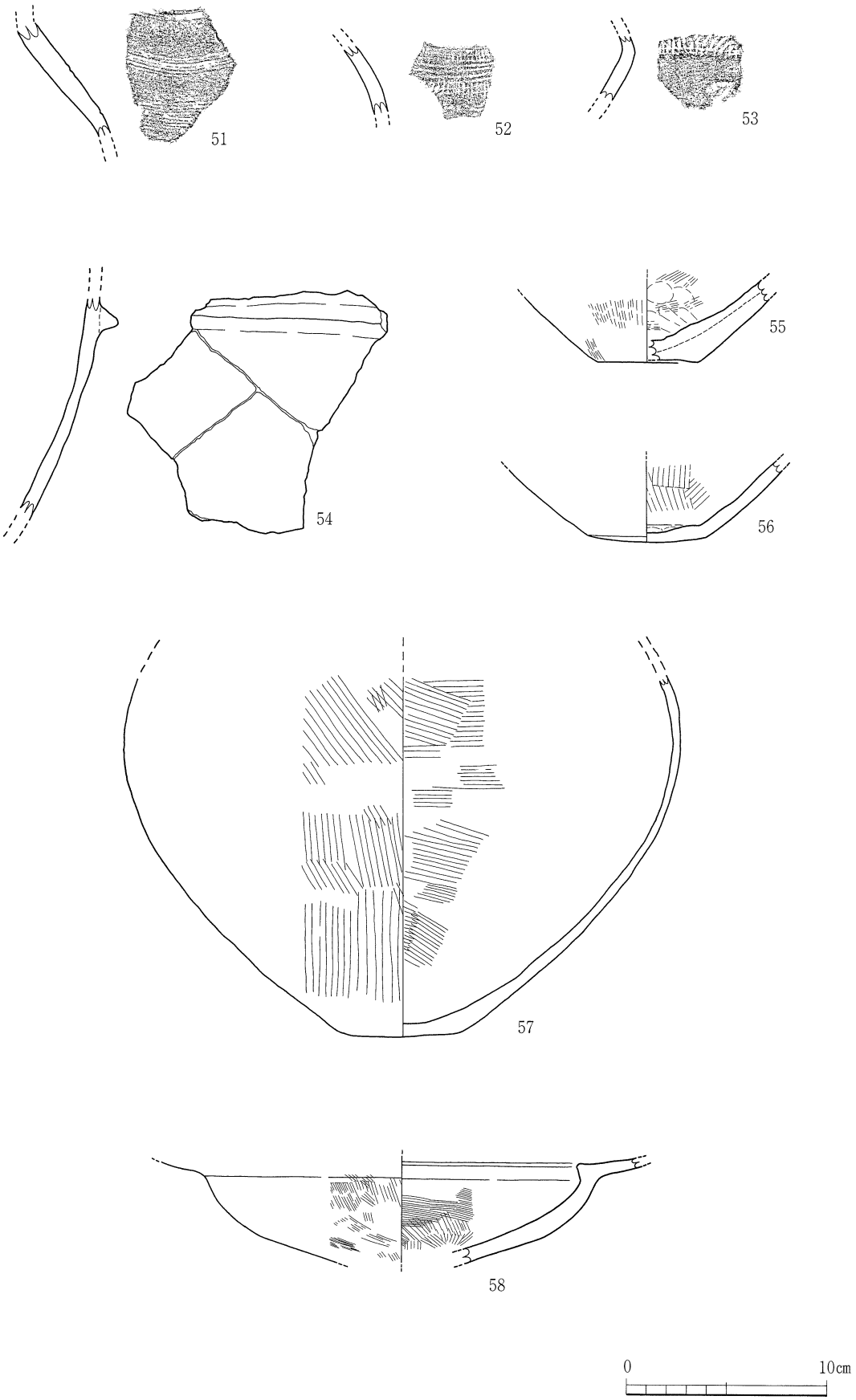




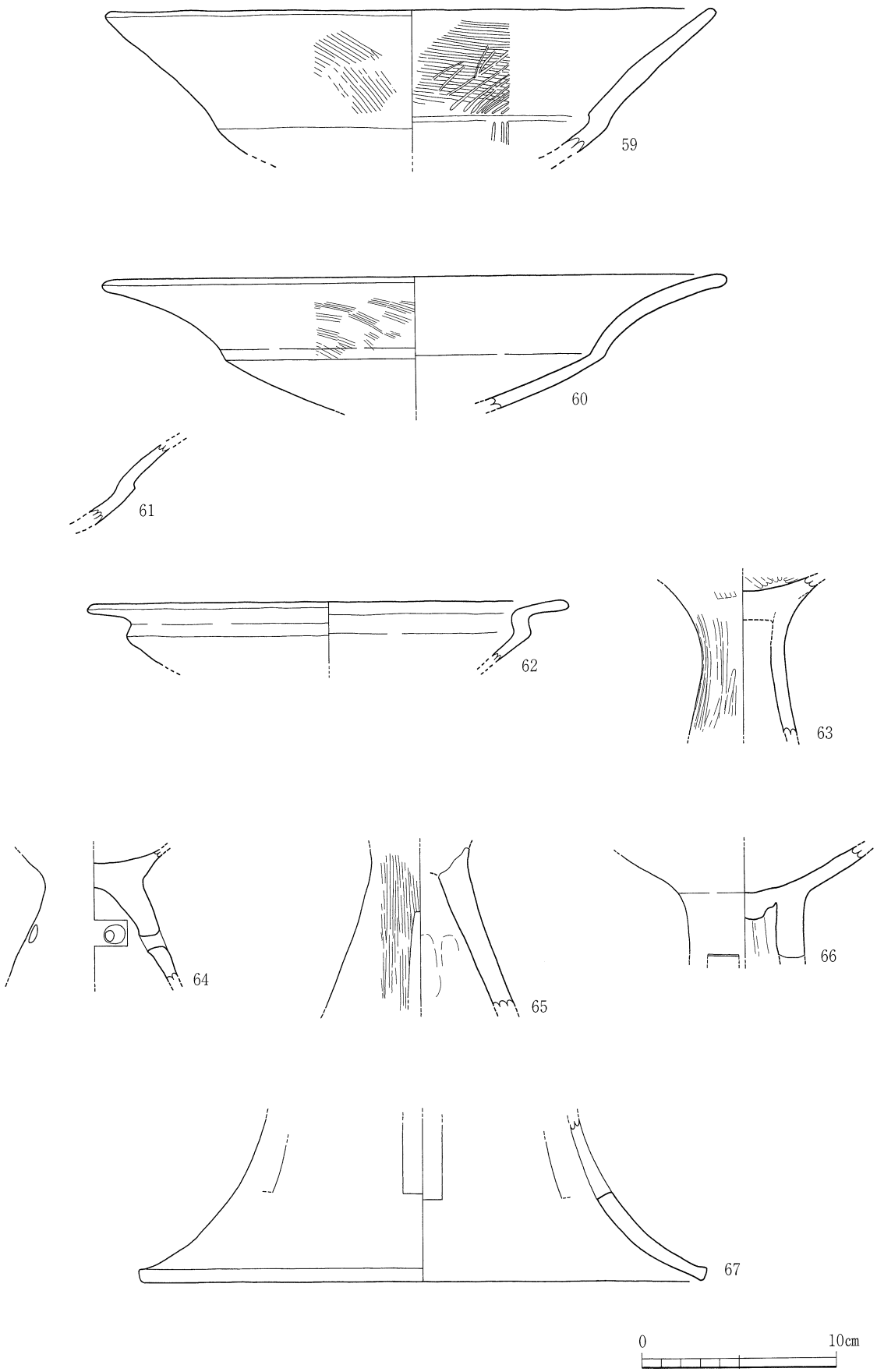
第17図　S－002炭化物集中範囲（上・上層、下・下層）



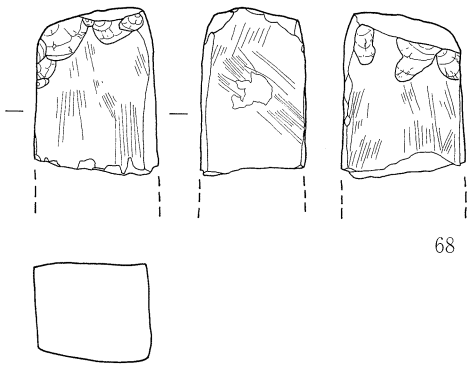
第18図　Ｓ－002出土遺物実測図（1）

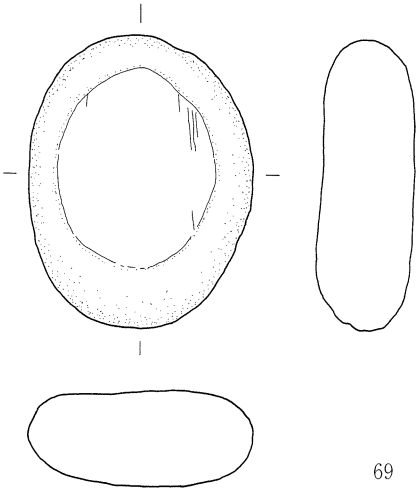


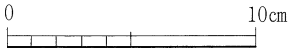
第19図　S－002出土遺物実測図（2）



第20図　Ｓ－002出土遺物実測図（3）







第21図　S－002出土遺物実測図（4）

Ｓ－006出土遺物－土器－（第23図70～73）

甕形土器１点、壷形土器１点、高坏形土器２点、総点数４点を図化した。

70は甕形土器の胴部である。刻み目を施した突帯を持つ。調整は内外面ともにナデ。

71は複合口縁の壷形土器である。胴部は強く張り、頸部は強くくびれる。外反する一次口縁から直立気味に二次口縁が立ち上がる。調整は口縁部内外面ともにナデ、胴部内面に指頭圧痕を残す。熊本県内では類例がないようである。口径12.6㎝、器高8.4㎝。

72は高坏形土器の口縁部の資料である。屈曲部外面に断面M字状の突帯を貼り付けている。突帯には刻み目が施されている。調整は口縁部外面ナデ、坏部外面刷毛目。内面はナデ。73は高坏形土器の脚部である。脚柱部のみであり、中空に作られている。調整は外面刷毛目、内面ナデ。

Ｓ－007出土遺物－土器－（第23図74・75）

高坏形土器２点を図化した。74は高坏形土器の口縁部の資料である。坏部はやや深めになると思われ、口縁部と坏部の境界に、上方に延びる小突帯を持つ。調整は器外面刷毛目、内面は摩耗のため不明。75は高坏形土器の脚裾部である。端部に向かって大きく広がり、裾部から脚柱部への屈曲部に円孔を穿っている。調整は外面ミガキ、内面刷毛目。また、外面には赤彩を施している。底形13.3㎝。

Ｓ－008・009・010（第24図）

調査２区西側中央で確認した。遺物包含層である基本土層Ⅱ層で確認できず、Ⅲ層黄燈色土層面まで掘り下げて確認されたため、遺構の一部しか検出できなかった。Ｓ－008とＳ－009は切り合い関係を明確に確認することができなかったため1つの遺構としての可能性も考えられるが、その場合一つの遺構としての積極的に判断する事もできないため、それぞれ単独遺構として扱った。また、Ｓ－010は調査区外まで延びているようである。Ｓ－008・009・010すべて弥生時代後期後半の土器片が出土しているが、図化できる資料はなかった。

Ｓ－004・005（第25図）

調査２区東側で確認した。Ｓ－004は長軸1.44ｍ、短軸0.81ｍ、深さは検出面から最大で0.25ｍを測る。Ｓ－005は長軸1.2ｍ、短軸0.9ｍ、深さは検出面から最大で0.3ｍを測る。弥生土器片が数点出土しており、単独で時期判定は難しいが、周辺遺構および包含層出土遺物とあわせて考えれば、弥生時代後期後半～終末期の遺構と判断される。出土遺物で図化できる資料は無かった。

デ。口径16.0cm、器高3.2cm。51は壺形土器の肩部片である。肩部に6～9条の沈線帯を3段めぐらせている。52・53は免田式土器の胴部片である。54は壺形土器の胴部片である。断面三角形の貼付突帯を1条持つ。調整は突帯部ナデ、その他部分は摩耗のため不明。55は壺形土器の底部である。底部形状はやや上げ気味の平底、調整は外面刷毛目、内面刷毛目、指頭圧痕を残す。56は壺形土器の底部である。底部形状はやや丸みを帯びた平底である。調整は外面ナデ、内面刷毛目、指頭圧痕を残す。57は壺形土器である。肩部より上部を欠いている。胴部は球形で強く張る。底部は平底である。調整は内外面ともに刷毛目。胴部径27.8cm、器高18.0cm。

58～66は高坏形土器である。58は坏部のみで、口縁部と脚部を欠いている。浅い椀形の坏部を呈し、坏部と口縁部の境界に小さな突帯をめぐらせている。調整は内外面ともに刷毛目。59は高坏形土器の坏部である。浅い皿状の坏部に、ほぼ直線的に開く口縁部を持つ。調整は器外面刷毛目、器内面は刷毛目の後放射状にミガキを施している。口径31.4cm、器高7.3cm。60は高坏形土器の坏部である。浅い皿状の坏部から屈曲し、外反しながら大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は丸く仕上げている。調整は器外面刷毛目、器内面は摩耗のため不明。口径31.6cm、器高6.8cm。61は高坏形土器の坏部断片である。60の類似資料と考えられる。62は坏部のみで坏底部と脚部を欠いている。坏部から屈曲してほぼ直立し、更に直角に曲がり口縁部へと至る。口縁部は短く、端部は丸く仕上げている。口径24.4cm、器高3.1cm。63は坏底部～脚柱部の資料である。脚部は中空で、調整は器内外面ともにミガキ、脚部内面のみナデ。64は坏底部から脚部である。円孔を穿ってあり現状で4個確認されるが、全体で何個あったかは不明。調整は摩耗のため不明。65は脚部の断片資料である。長方形の透かしを穿っており、現状で2個確認できる。調整は器外面刷毛目、器内面ナデ。66は坏底部のみの資料である。長方形と思われる透かしを3個穿っている。調整は脚部内面に工具ナデを確認できるが、その他は摩耗のため不明。

67は器台形土器である。長方形の透かし穴を持ち、現状で2個確認できる。底径は復元で28.7cmを測る。調整は摩耗のため不明。

出土遺物ー石器ー（第21図）

石器は出土した資料のうち、2点を図化した。68は砥石である。断面四角形で角柱状を呈しており、全面を使用している。石材は天草陶石。69は砥石である。扁平な長楕円礫を利用している。石材は天草陶石。

S－006・007（第22図）

調査2区中央部から北側の箇所で確認した。006と007は切り合い関係にあり、007の後に006が作られている。平面形は不整形な円形を呈する竪穴住居跡である。柱は4本である。長軸で4.4m、短軸で3.36m、遺構の深さは検出面から最大で0.42mを測る。弥生時代後期後半の土器片が出土している。

Ｓ－006出土遺物－土器－（第23図70～73）

甕形土器１点、壷形土器１点、高坏形土器２点、総点数４点を図化した。

70は甕形土器の胴部である。刻み目を施した突帯を持つ。調整は内外面ともにナデ。

71は複合口縁の壷形土器である。胴部は強く張り、頸部は強くくびれる。外反する一次口縁から直立気味に二次口縁が立ち上がる。調整は口縁部内外面ともにナデ、胴部内面に指頭圧痕を残す。熊本県内では類例がないようである。口径12.6cm、器高8.4cm。

72は高坏形土器の口縁部の資料である。屈曲部外面に断面M字状の突帯を貼り付けている。突帯には刻み目が施されている。調整は口縁部外面ナデ、坏部外面刷毛目。内面はナデ。73は高坏形土器の脚部である。脚柱部のみであり、中空に作られている。調整は外面刷毛目、内面ナデ。

Ｓ－007出土遺物－土器－（第23図74・75）

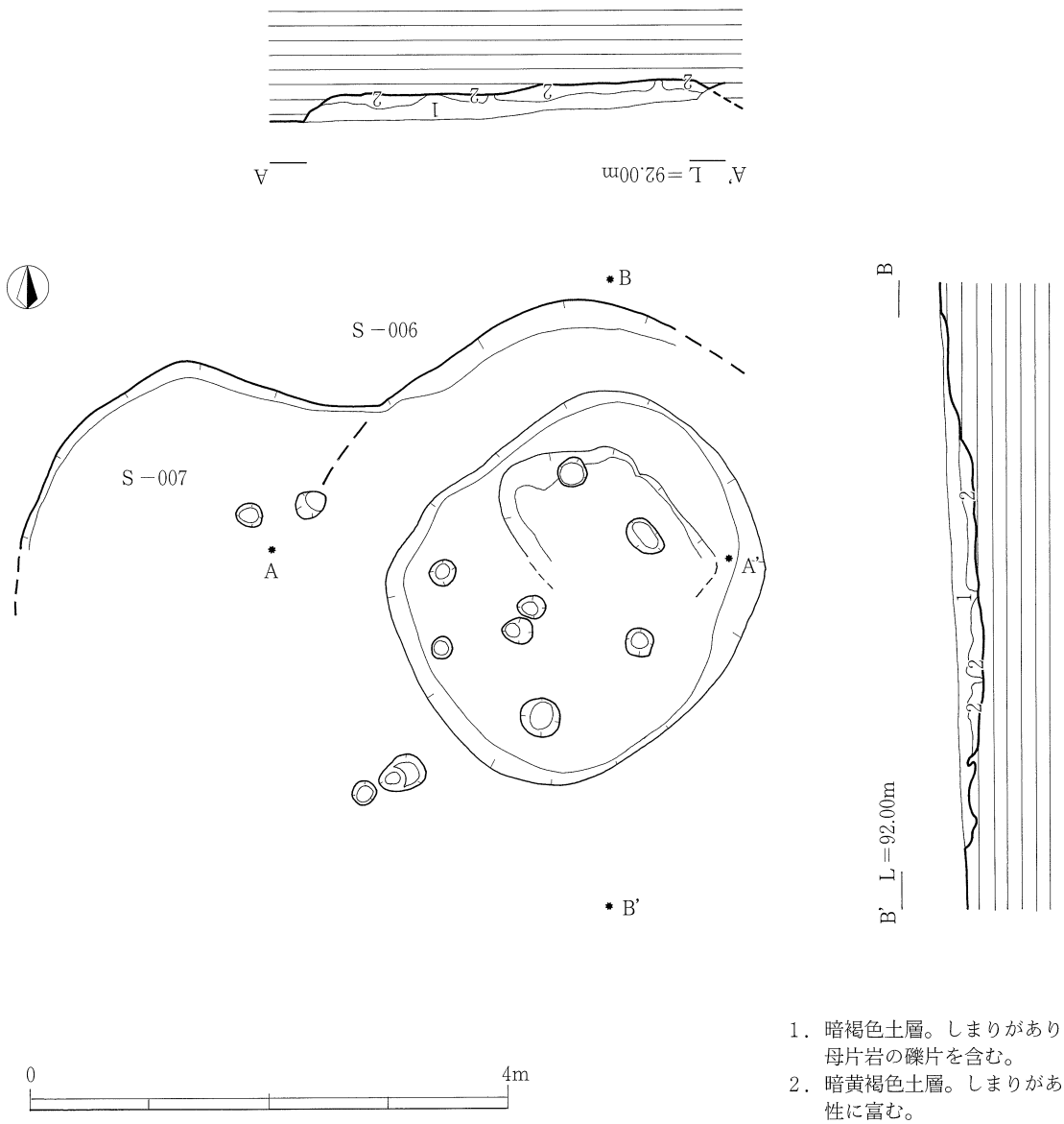
高坏形土器２点を図化した。74は高坏形土器の口縁部の資料である。坏部はやや深めになると思われ、口縁部と坏部の境界に、上方に延びる小突帯を持つ。調整は器外面刷毛目、内面は摩耗のため不明。75は高坏形土器の脚裾部である。端部に向かって大きく広がり、裾部から脚柱部への屈曲部に円孔を穿っている。調整は外面ミガキ、内面刷毛目。また、外面には赤彩を施している。底形13.3cm。

Ｓ－008・009・010（第24図）

調査２区西側中央で確認した。遺物包含層である基本土層Ⅱ層で確認できず、Ⅲ層黄燈色土層面まで掘り下げて確認されたため、遺構の一部しか検出できなかった。Ｓ－008とＳ－009は切り合い関係を明確に確認することができなかったため1つの遺構としての可能性も考えられるが、その場合一つの遺構としての積極的に判断する事もできないため、それぞれ単独遺構として扱った。また、Ｓ－010は調査区外まで延びているようである。Ｓ－008・009・010すべて弥生時代後期後半の土器片が出土しているが、図化できる資料はなかった。

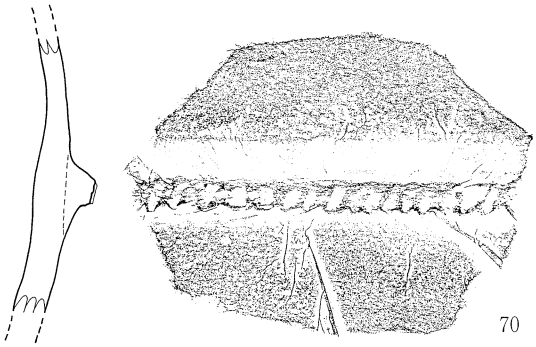
Ｓ－004・005（第25図）

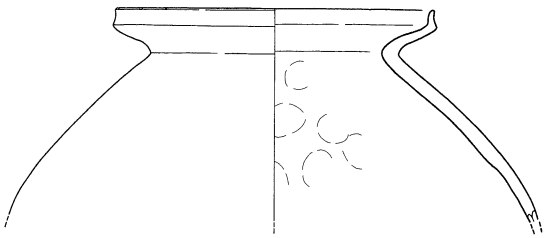
調査２区東側で確認した。Ｓ－004は長軸1.44m、短軸0.81m、深さは検出面から最大で0.25mを測る。Ｓ－005は長軸1.2m、短軸0.9m、深さは検出面から最大で0.3mを測る。弥生土器片が数点出土しており、単独で時期判定は難しいが、周辺遺構および包含層出土遺物とあわせて考えれば、弥生時代後期後半～終末期の遺構と判断される。出土遺物で図化できる資料は無かった。

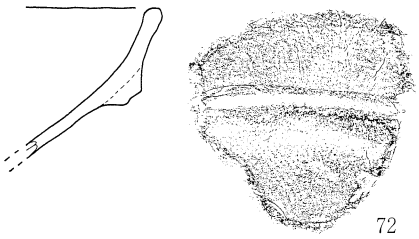


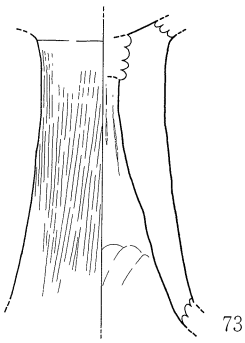
1．暗褐色土層。しまりがあり、雲母片岩の礫片を含む。
2．暗黄褐色土層。しまりがあり粘性に富む。

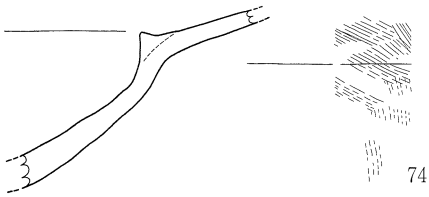
第22図　S－006・007実測図

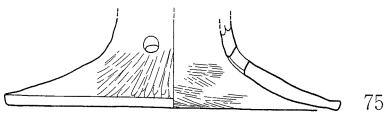


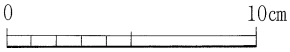




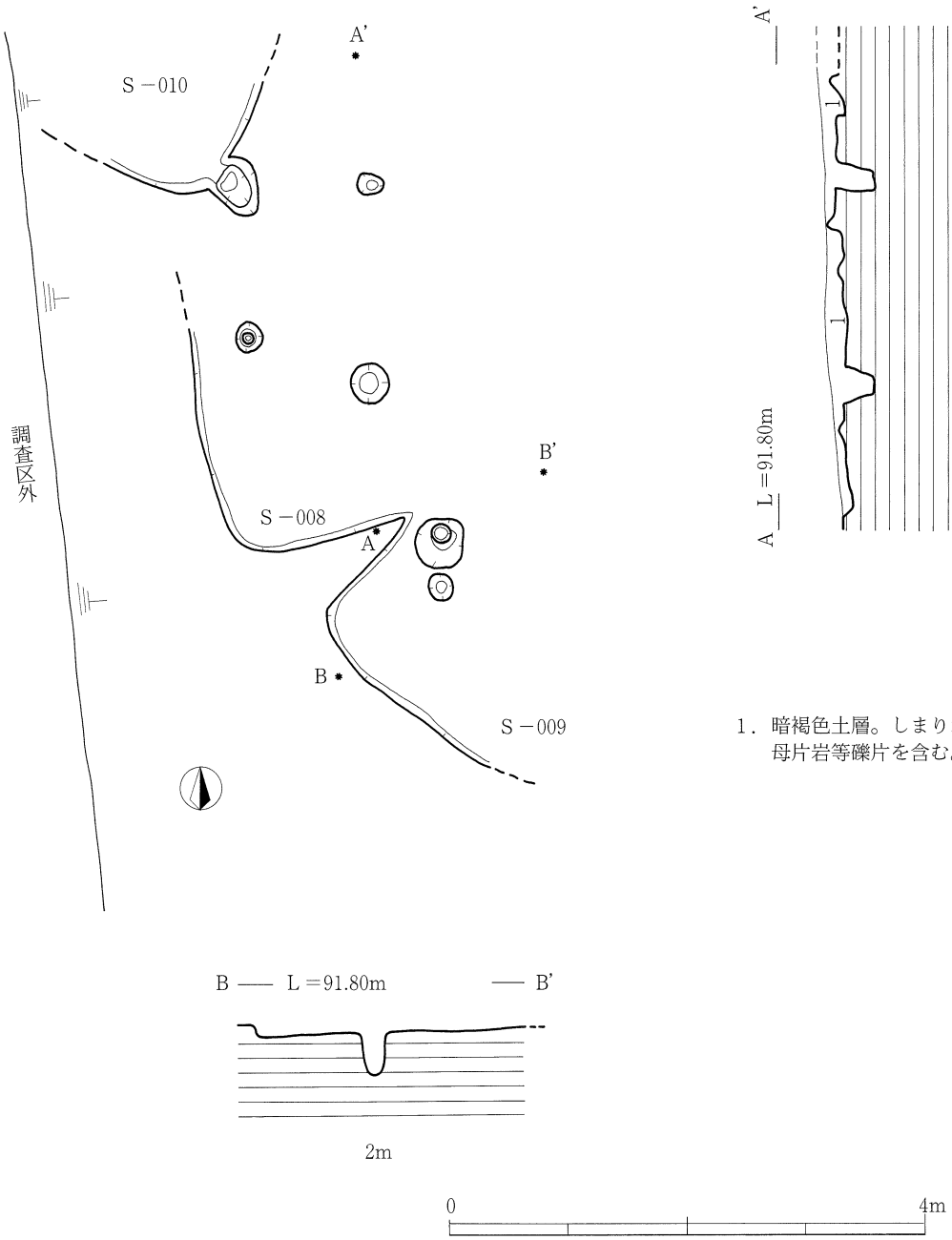






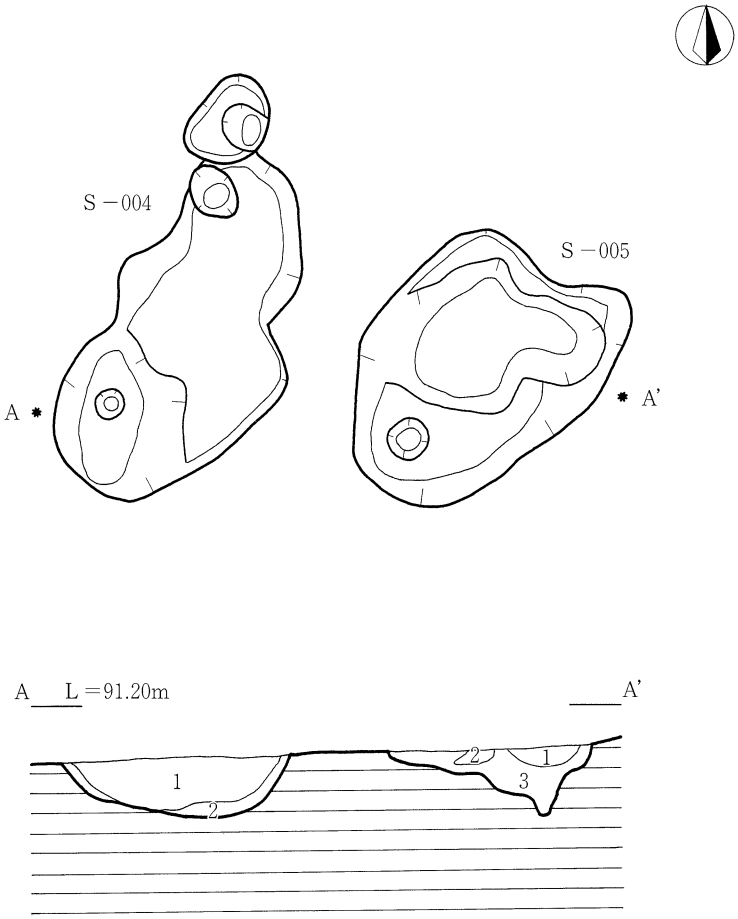


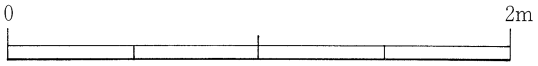
第23図　S－006・007出土遺物実測図



1．暗褐色土層。しまりがあり、雲母片岩等礫片を含む。

第24図　S－008・009・010実測図

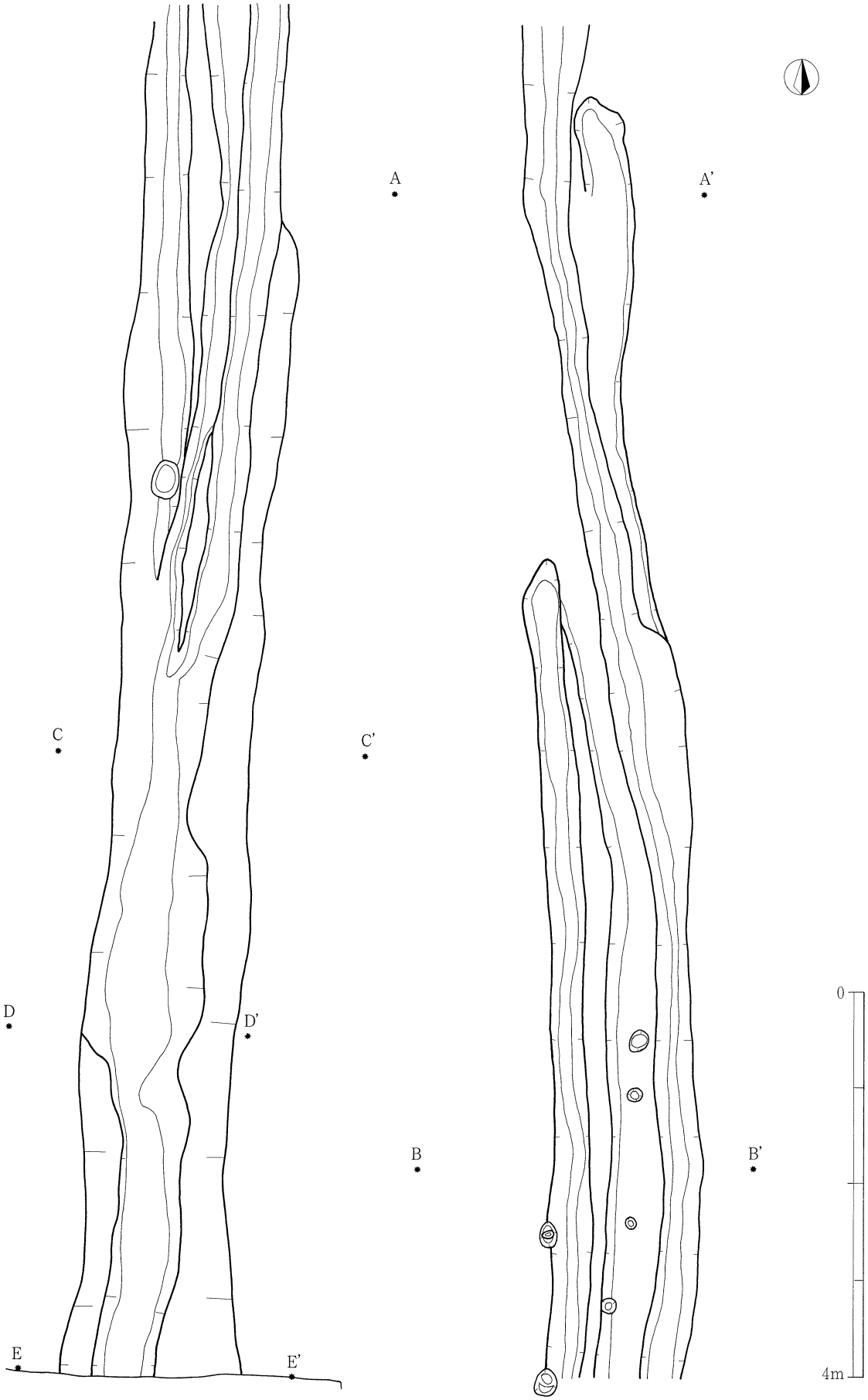




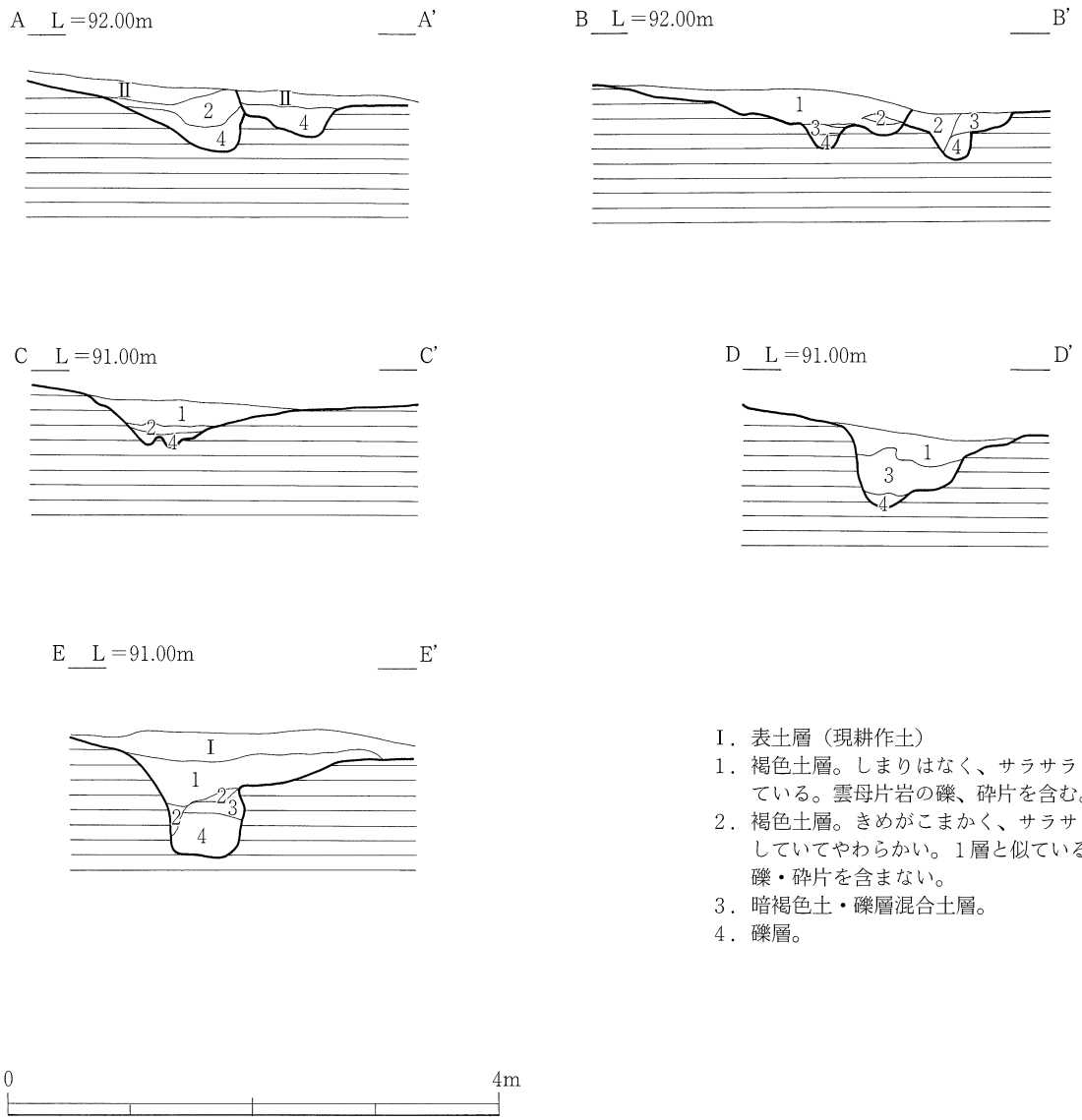
S－004
1．黒褐色土層。わずかに粘性としまりを有する。小礫・礫片を含む。
2．暗黄褐色土層。弱い粘性としまりを有する。雲母片石の砕片を含む。

S－005
1．黒褐色土層。きめがこまかく、サラサラとしている。
2．明黄褐色土層。わずかに粘性を有するがしまりがなく、ボロボロとしている。
3．暗灰色土層。しまりがあり、強い粘性を有する。小礫を含む。

第25図　S－004・005実測図



第26図　S－001実測図



Ⅰ．表土層（現耕作土）
1．褐色土層。しまりはなく、サラサラとしている。雲母片岩の礫、砕片を含む。
2．褐色土層。きめがこまかく、サラサラとしていてやわらかい。1層と似ているが、礫・砕片を含まない。
3．暗褐色土・礫層混合土層。
4．礫層。

第27図　S－001土層断面実測図

(2) 近世～近代の遺構

S－001（第26図、第27図）

調査２区中央を縦断している。３回作り変えが行われており、断面で切り合い関係が確認することができる。出土遺物は殆ど無く、磁器片が３点出土しているのみである。図化することはできなかったが、17世紀初頭のものである。

(3) 遺構外出土の遺物（第28図～34図）

土器（第28図～31図）

甕形土器12点、壷形土器21点、高坏形土器４点、器台形土器３点、製塩土器１点を図化した。

76～87は甕形土器である。76は甕形土器の口縁部から肩部である。頸部でくの字に屈曲して開き、口縁端部は角張っている。調整は器外面口縁部刷毛目のあとヨコナデ、肩部刷毛目。器内面ヨコナデ。口径12.8cm。77も同様に甕形土器の口縁部から肩部である。頸部でくの字に屈曲して開くが、くびれがやや弱い。口縁端部は角張っている。調整は器外面口縁部ヨコナデ、肩部刷毛目。器内面口縁部刷毛目の後ヨコナデ、刷毛目。口径24.0cm。78は甕形土器の胴部から頸部である。口縁部を欠いているが、くの字を呈すると思われる。調整は器内外面ともに刷毛目。79は甕形土器の胴部から頸部である。調整は器内外面ともに刷毛目。80、81は甕形土器の胴部片である。別個体であるが、斜め方向の刻み目を施す突帯を貼り付けている。調整は両方ともナデ調整である。82は甕形土器の胴部片である。突帯の中央をナデにより凹みをつけ、断面M字状を呈する。その上下には刻み目を施している。調整は内外面ともに刷毛目、突帯部ナデ。83、84、85、86は甕形土器の脚台である。87は長胴の甕形土器の胴部である。器壁が３㎜～5㎜と非常に薄く作られている。調整は器外面刷毛目、器内面に指頭圧痕を残し、その後に刷毛目を施している。

88～108は壷形土器である。88は壷形土器の頸部から肩部である。頸部に沈線をめぐらせ、その下部に逆Ｌ字状に沈線で文様を施している。89は壷形土器の口縁部から頸部である。調整は器外面刷毛目、内面刷毛目、ナデ。口縁屈曲部に指頭圧痕を残す。90は大型の複合口縁壷である。頸部は外反しながら開き、内傾して立ち上がる口縁形状である。口径33.0cm。調整は器外面口縁部および肩部ナデ、頸部は磨耗のため不明。内面も磨耗のため不明。口縁屈曲部外面に断面三角形の粘土帯を貼り付け刻み目を施している。頸部と肩部の境界には貼付突帯を持つ。91は壷形土器の頸部である。調整は器外面刷毛目、頸部と肩部の境界に断面三角形の貼付突帯を２条持つ。内面磨耗と剥離のため不明。92は壷形土器の肩部である。山形文を刻んでおり、その上下に斜め方向の短い刻線を施している。その後、刷毛目を施している。内面も刷毛目調整である。93は壷形土器の肩部断片と思われる。磨耗が激しくうっすらとしか分からないが、沈線を数条施し、その下に重孤文を施している。94は壷の肩部である。８条の沈線を施し、そ

の下に波状文を施す。95は複合口縁を持つ壷形土器である。頸部は大きく開き、突帯を貼り付け、直立する複合口縁を作り出している。口縁端部は角張っており、平坦面を持つ。口縁部外面には派状文を施している。口径20.0cm。96は複合口縁を持つ壷形土器である。大きく外反しながら開く頸部に直立する口縁部を持つ。口縁部の下に小さな突帯を貼り付けており、細かい刺突文を施す。口径26.8cm。調整は磨耗のため不明。97は複合口縁壷の口縁部断片である。外面に断面三角形の突帯を貼り付け、複合口縁を作り出している。98は複合口縁壷である。調整は内外面ともに刷毛目。99は複合口縁壷の口縁部断片である。外面に断面三角形の突帯を貼り付け、複合口縁を作り出している。口縁部外面には刺突文を施している。100は複合口縁壷である。調整は器内外面ともに刷毛目。口径23.2cm。古墳時代初頭の時期と考えられる。101は複合口縁壷である。頸部は外反しながら大きく開き、屈曲して口縁部へと至る。調整は器外面ナデ、刷毛目後ナデ。器内面磨耗のため不明。古墳時代初頭か。102は複合口縁壷である。頸部は外反しながら開き、屈曲して短く伸びる口縁部を持つ。肩は張るようである。口径12.6cm。調整は口縁部内外面ともにナデ、胴部内面刷毛目。古墳時代初頭の土師器か。103は複合口縁壷の口縁部断片である。調整は器内外面ともにナデ。104は壷形土器の口縁部断片である。外面端部下に小さな突帯を貼り付け、平坦面をもつ。調整は器内外面ともに磨耗のため不明。105は壷形土器の底部である。平底で、底面に土器製作台の痕跡を残す。106は壷形土器の底部である。平底で、屈曲部は明確な稜を持つ。底部径9.6cm。弥生時代中期の土器か。調整は器外面刷毛目、ナデ。内面は磨耗と剥離のため不明。107は壷形土器の底部である。平底で、調整は器内外面ともに磨耗のため不明。底部径5.0cm。108は壷形土器の底部である。丸底で、器壁は厚い。調整は器内外面ともに胴部刷毛目、底部ナデ。

109～112は高坏形土器である。109は口縁部と脚部を欠いている。器壁は厚く、坏部と口縁部との境界に小さく突出する稜を持つ。調整は器外面刷毛目、ナデ。器内面ナデ。110も109同様の特徴を持つ高坏形土器である。坏部は深い。調整は磨耗のためほとんど分からなくなっている。111は高坏形土器の脚部である。脚裾部を欠いているが、脚柱部から緩やかに広がっていくようである。脚柱部は中空。調整は外面刷毛目後ミガキ、内面ナデ。

113～115は器台形土器である。113は器台形土器の脚部破片で、両側に長方形と思われるすかしを持つ。器外面に線刻で文様を施す。横方向に４条線を引き、その後右上から左下の方向に向かって刻線を刻む。その下側には１条の線で曲線状の文様を描く。調整は器内面ナデ、外面刷毛目。114は器台形土器の脚部破片である。113同様、両側に長方形と思われるすかしを持つ。また、線刻で文様を施す点、調整も似ており113と同一固体の可能性もあるが、今のところ接合点はなく別固体として取り扱った。115は器台形土器の裾部である。すかしを持つようである。端部は角張っており、つまみあげにより稜を持つ。調整は端部ナデ、その他の部分は磨耗により不明。

116は製塩土器である。いわゆる「天草式製塩土器」の一部で、脚部のみの破片である。手づくねにより成形され、脚裾部はつまみ出しにより作られる。そのため、裾部と柱部の境界には指圧痕が残る。脚柱部は上方に向かって広がっている。脚柱部が上方にどれだけ伸びるかは不明だが、あまり伸びず寸が詰まったような形態になるのではないかと推測される。所属時期の詳細は不明であるが、包含層中の他の出土土器から弥生時代後期～古墳時代前期の範疇に含まれると考えられる。

石器（第32図～34図）

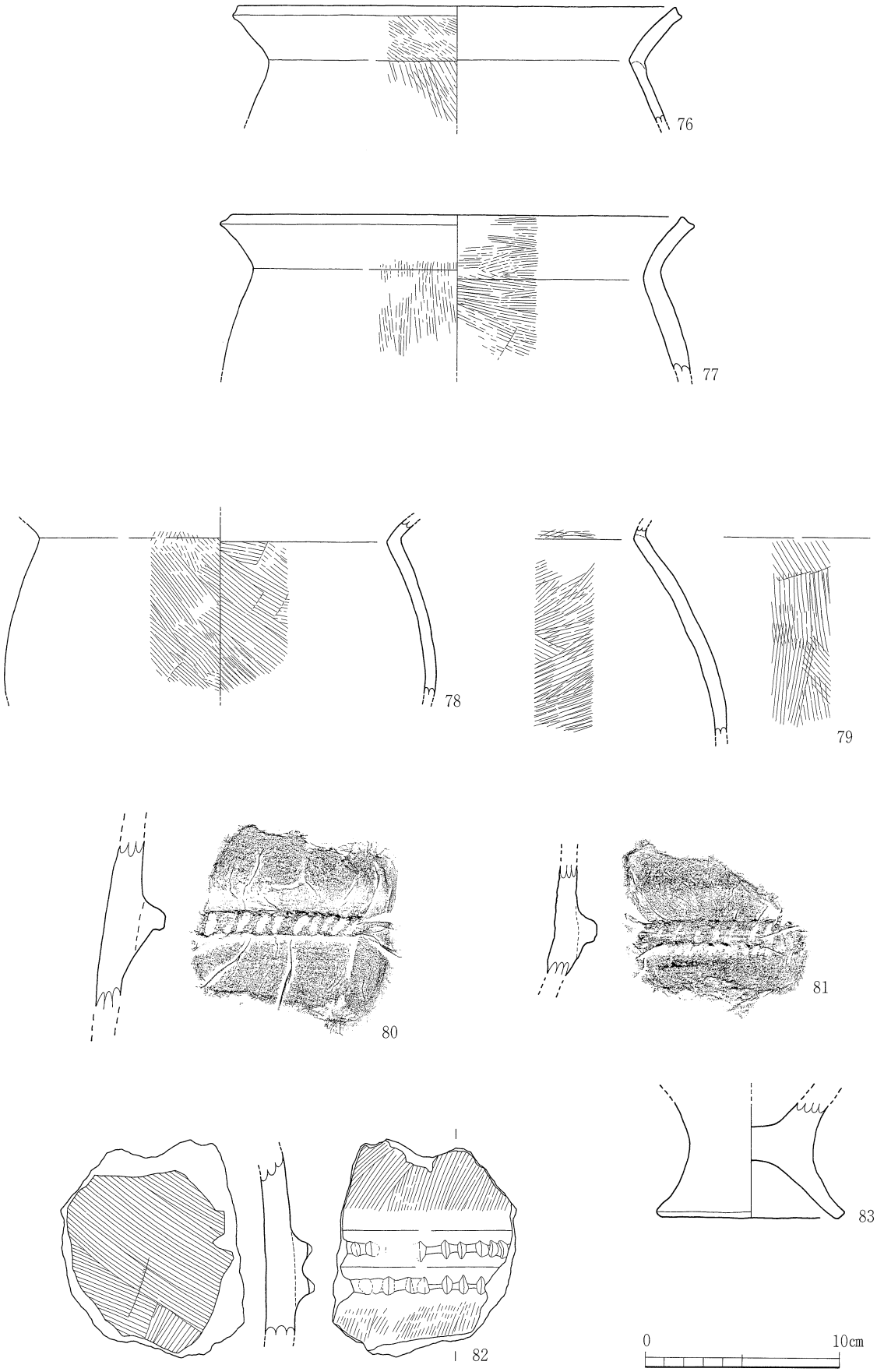
石器は石斧２点、敲石７点、砥石４点、台石２点、総点数15点を図化した。

117は磨製石斧である。形態は扁平な角柱状を呈しており、全体を丁寧に磨いている。刃部を欠いている。石材は緑泥片岩を使用している。その形態及び特徴から弥生時代の所産と考えるのは困難であるが、周辺から弥生時代後期～古墳時代前期以外の遺物の出土は無く、所属時期に疑問を残している。118は磨製石斧である。調査終了後、調査１区と２区の中間地点にあたる未調査区の畑の工事終了後に発見した。刃部を失っており、欠損部が新しいことから工事中に重機等により打ち欠かれたものであると考えられる。石材は玄武岩を使用している。

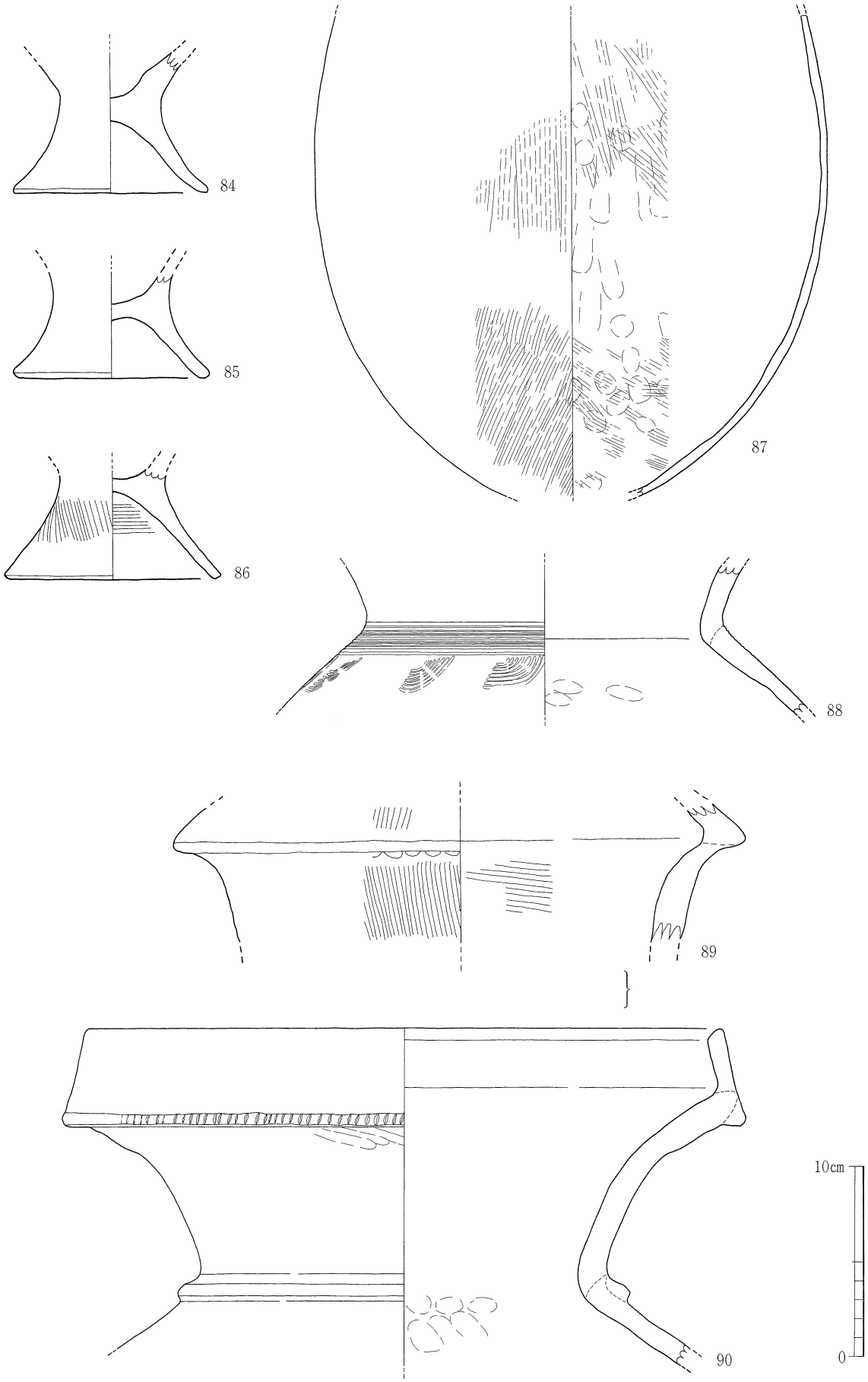
119は敲石である。拳大の扁平な円礫を使用している。表裏面に敲打痕を残す。石材は砂岩。120は敲石である。拳大の扁平な円礫を使用している。表裏面と周縁部に敲打痕を残す。石材は砂岩。121は敲石である。拳大の扁平な円礫を使用している。表裏面と周縁部に敲打痕を残す。石材は砂岩。122は敲石の破片である。周縁部にのみ敲打痕を残す。石材は玄武岩。123は敲石の破片である。表面と周縁部に一部敲打痕を確認できる。石材は砂岩。124は敲石である。厚みのある拳大の円礫を使用している。表裏面に顕著な敲打痕を残す。石材は砂岩。125は敲石である。厚みのある拳大の円礫を使用している。表面に顕著な敲打痕を残す。石材は砂岩。

126は砥石の破片である。127は砥石である。表裏面に顕著な摩擦痕を残し、凹み具合からかなりの使用度合いを推測することができる。石材は天草陶石。128は砥石の破片である。使用箇所以外は自然面を残しており、原形は長細い礫ではないかと推測される。石材は天草陶石。129は砥石の破片である。使用箇所以外は自然面を残す。石材は天草陶石。

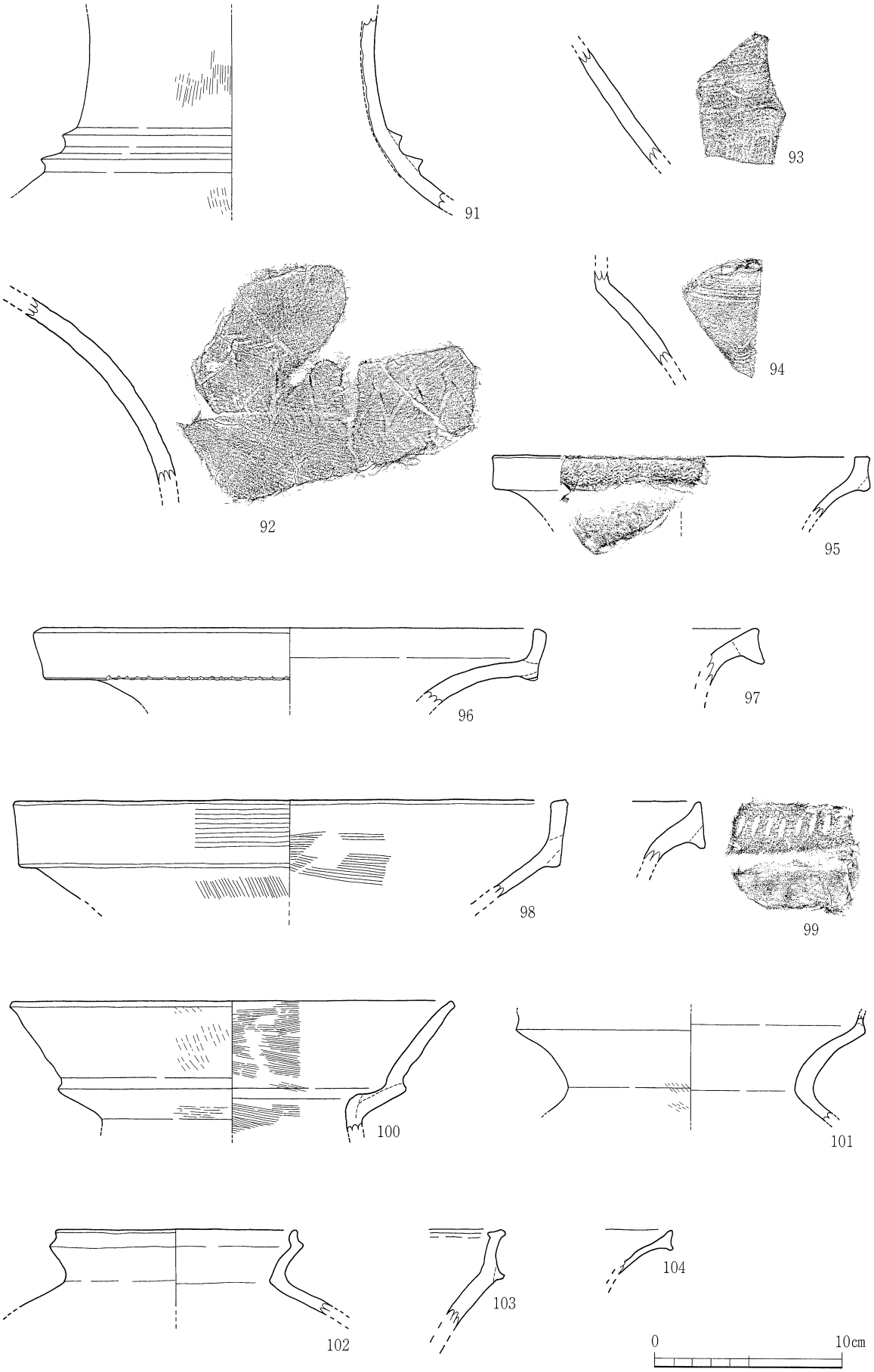
130は石皿である。表裏面に敲打痕を残し、その周辺に摩擦痕を確認することができる。石材は砂岩。131は石皿の破片である。表面のみを使用しており、摩擦により顕著な凹みが確認できる。石材は玄武岩。



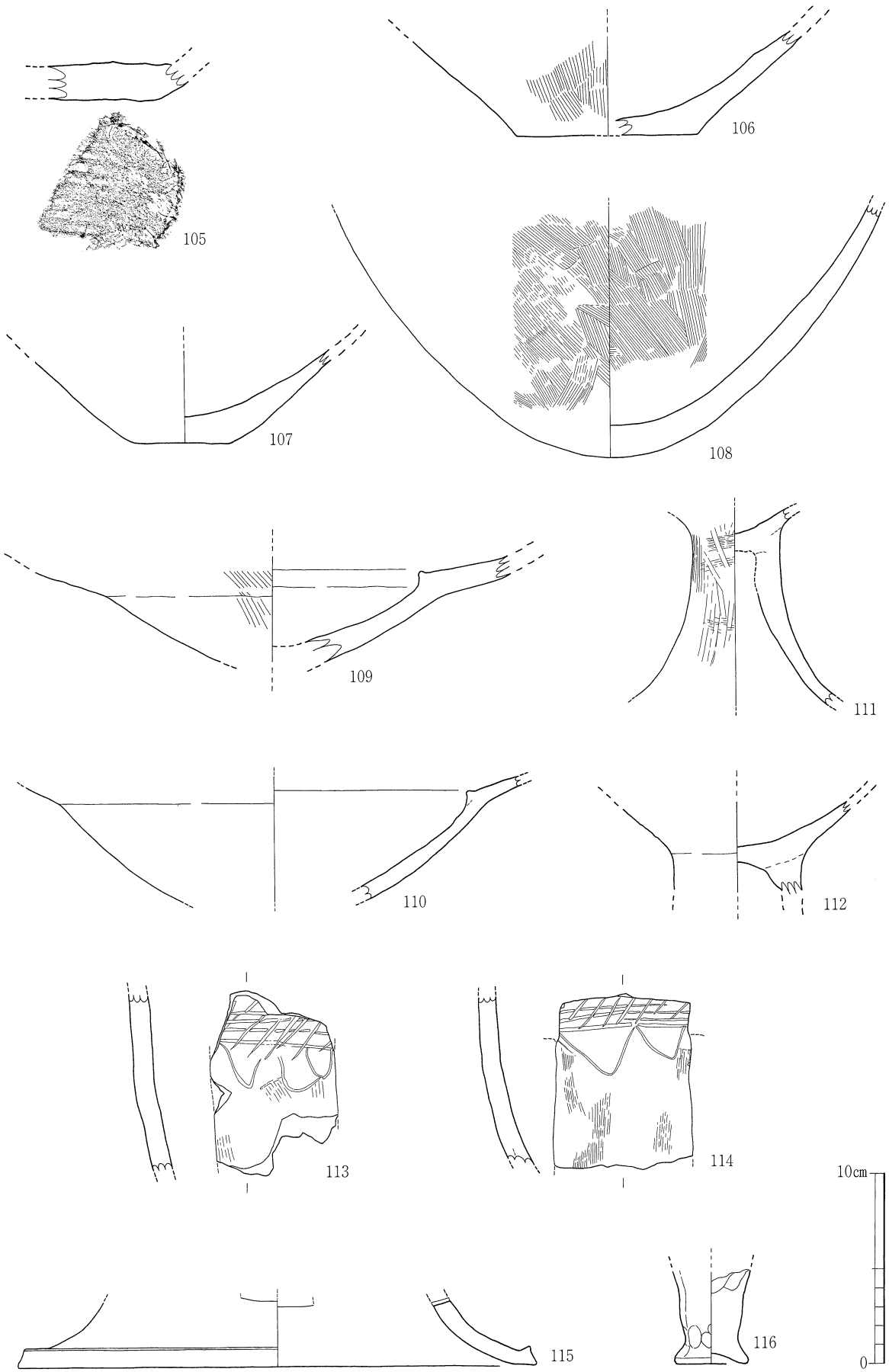
第28図　調査２区遺構外出土遺物実測図（1）



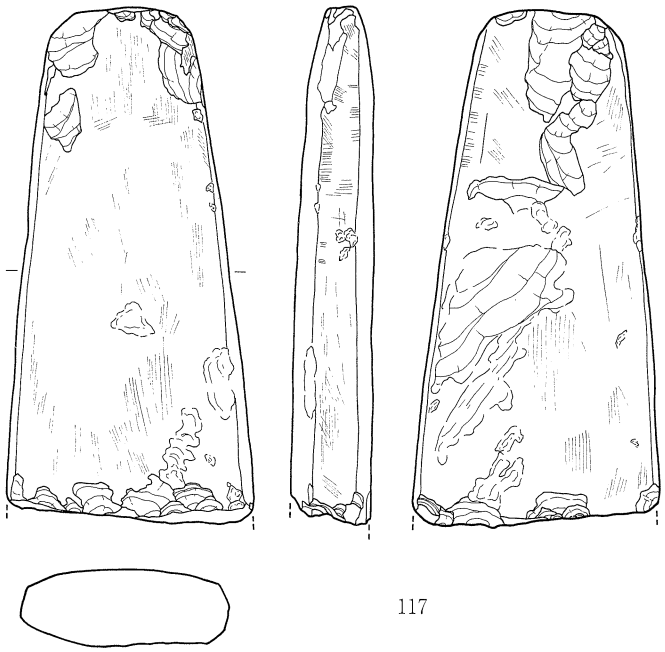
第29図　調査２区遺構外出土遺物実測図（2）

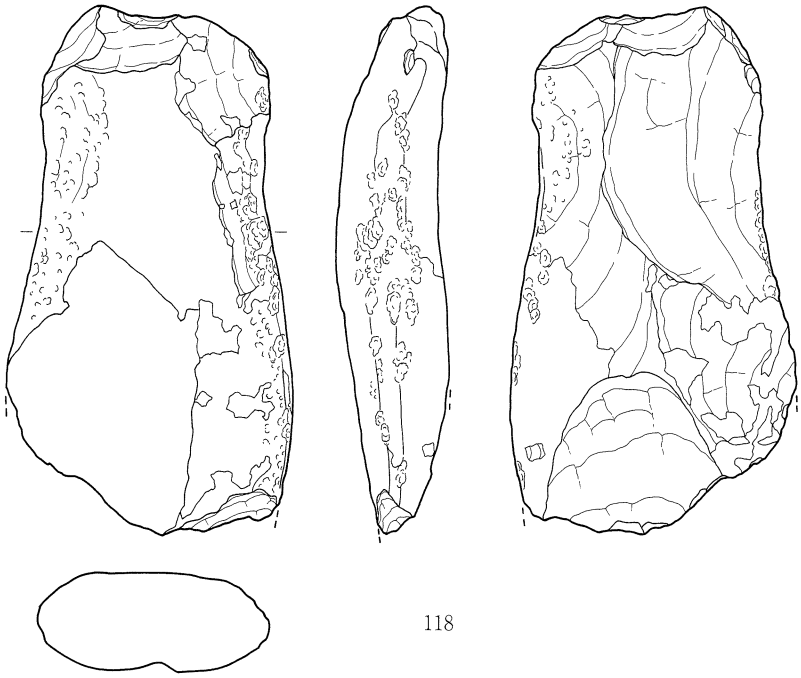


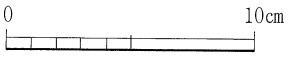
第30図　調査２区遺構外出土遺物実測図（3）



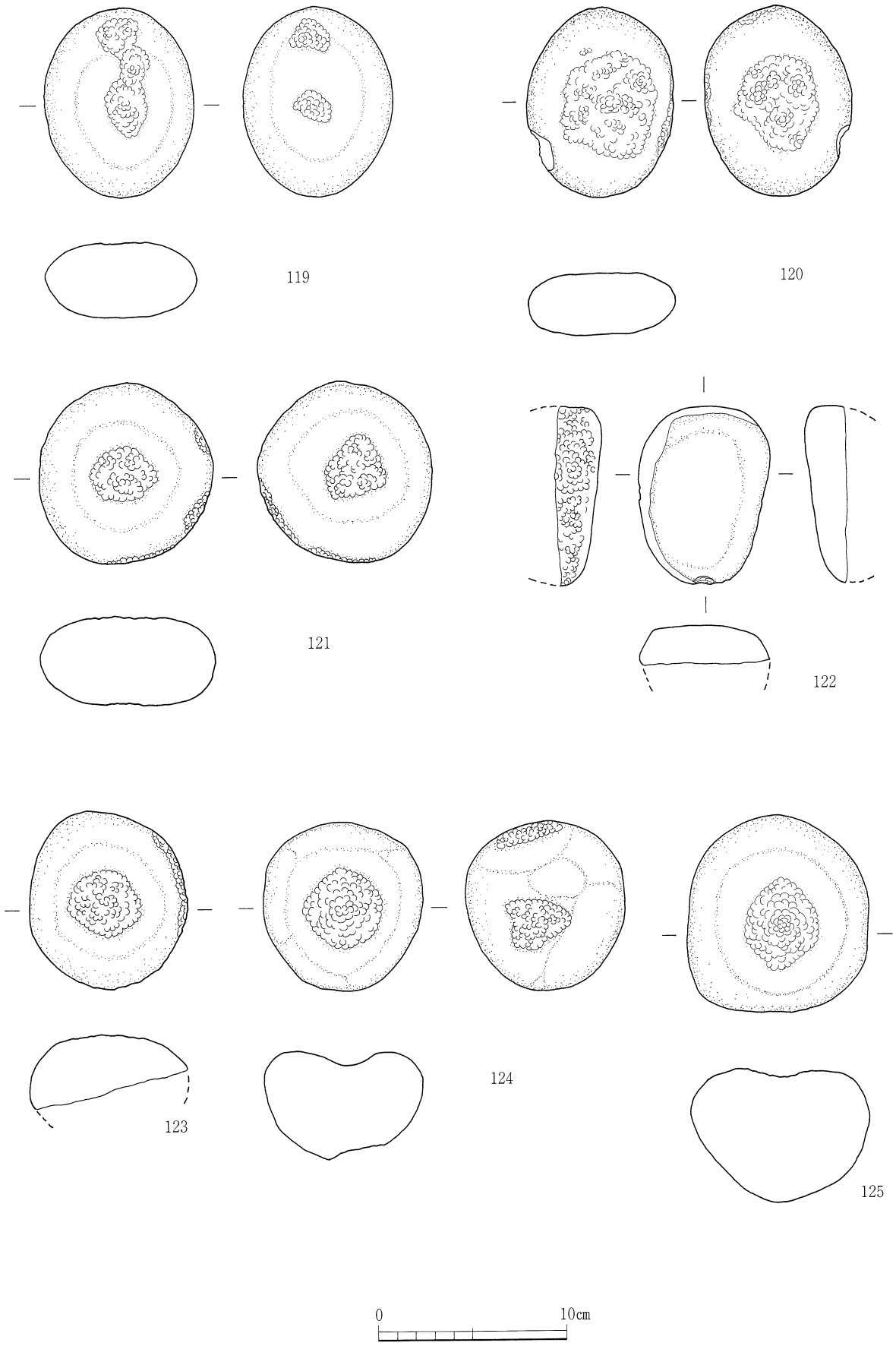
第31図　調査２区遺構外出土遺物実測図（4）



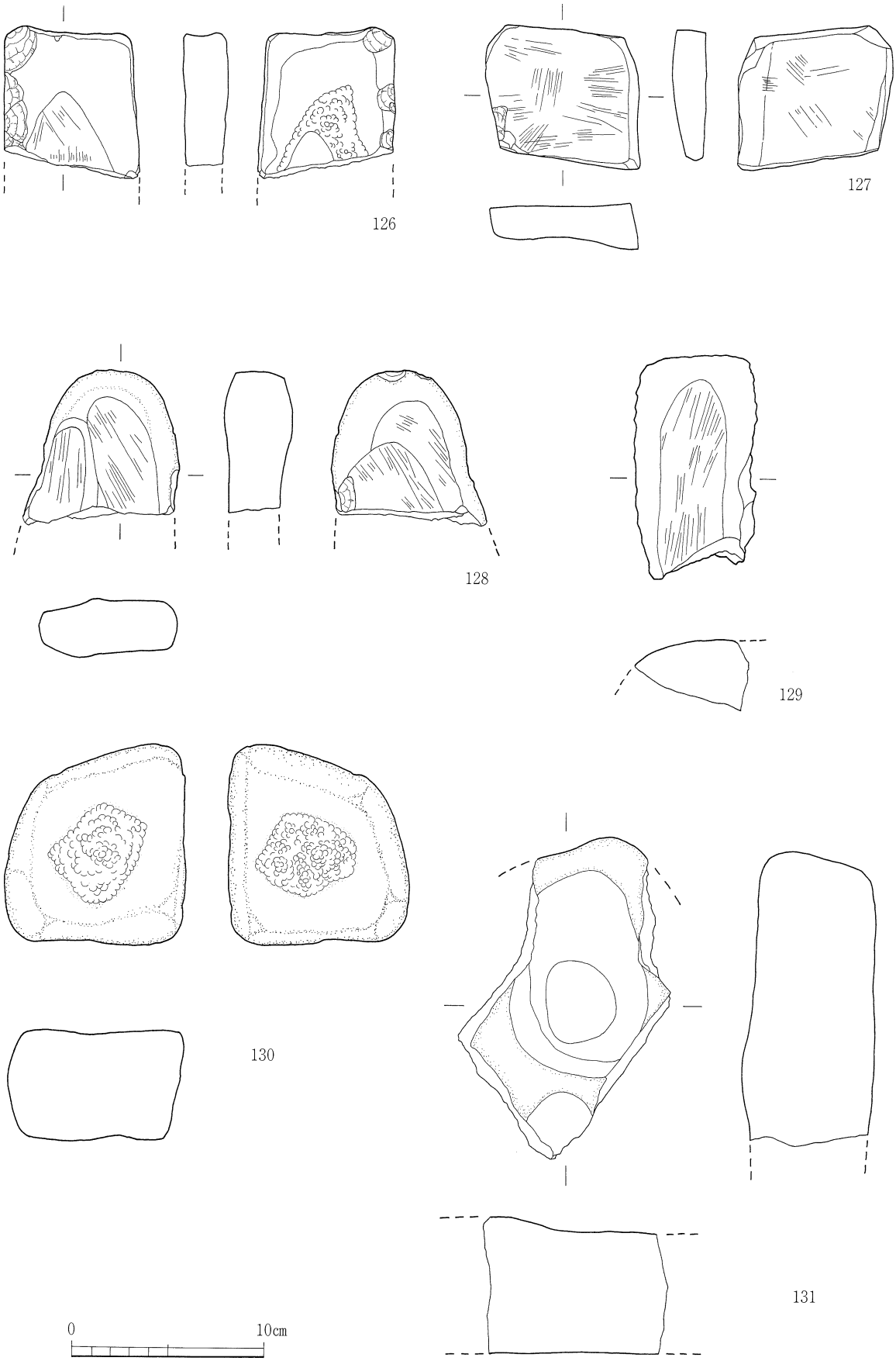




第32図　調査２区遺構外出土遺物実測図（5）



第33図　調査２区遺構外出土遺物実測図（6）



第34図　調査２区遺構外出土遺物実測図（7）

2　調査３区の調査（第15図）

調査３区は畑の耕作・造成により大きく削平を受けており、３区の中央より南側では、現耕作土を除去すると包含層である黒色土は無く基盤層である黄燈色土や、更に岩盤が露出する状態であった。中央より北側は数年前ジャガイモの根腐れ病が発生したことで、正確な数値は不明であるが1～1.5メートルほど部分的に撹拌したということであった。そのため、出土遺物、特に土器はローリングを受けて磨耗した物が大半であり、遺構も確認できなかった。以下に、図化できた出土遺物について説明する。

(1) 旧石器～縄文時代の遺物（第35図132、133）

旧石器～縄文時代の遺物は２点出土している。

132は細石刃核である。３区南側黄燈色土層上部から出土した。まず、右方向からの打撃により分割し、平坦面を作り出している。その後、側面部を逆方向からの打撃による石核調整を施し、平坦面を打面として細石刃を２枚剥離している。石材は黒曜石で、不純物をほとんど含まない良質の黒曜石である。黒曜石を使用した石器はこの１点のみで、他に出土は無かった。

133は小型の磨製石斧である。３区南側黄燈色土層上部から出土した。石材は頁岩か。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物（第35図134～135、第36図）

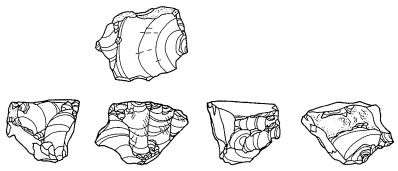
土器１点、石器４点を図化した。

134は鉢である。平底の底部である。調整は内外面ともにナデ、刷毛目。口径16.8cm、器高4.6cm。

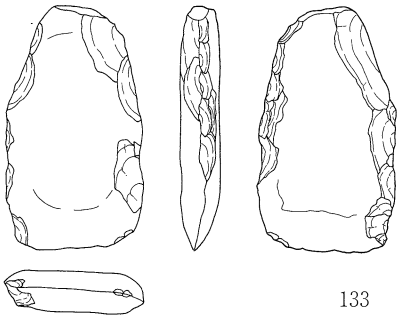
135は石皿である。中央部に敲打による使用痕、その周辺に摩擦痕が確認できる。石材は玄武岩。

136は砥石である。使用により角柱状を呈している。石材は天草陶石。137は砥石の破片である。表裏面を使用し、周縁部に自然面を残している。石材は天草陶石。

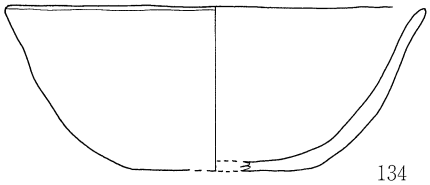
138は敲石である。表裏面及び周縁部に敲打痕を残す。石材は砂岩。



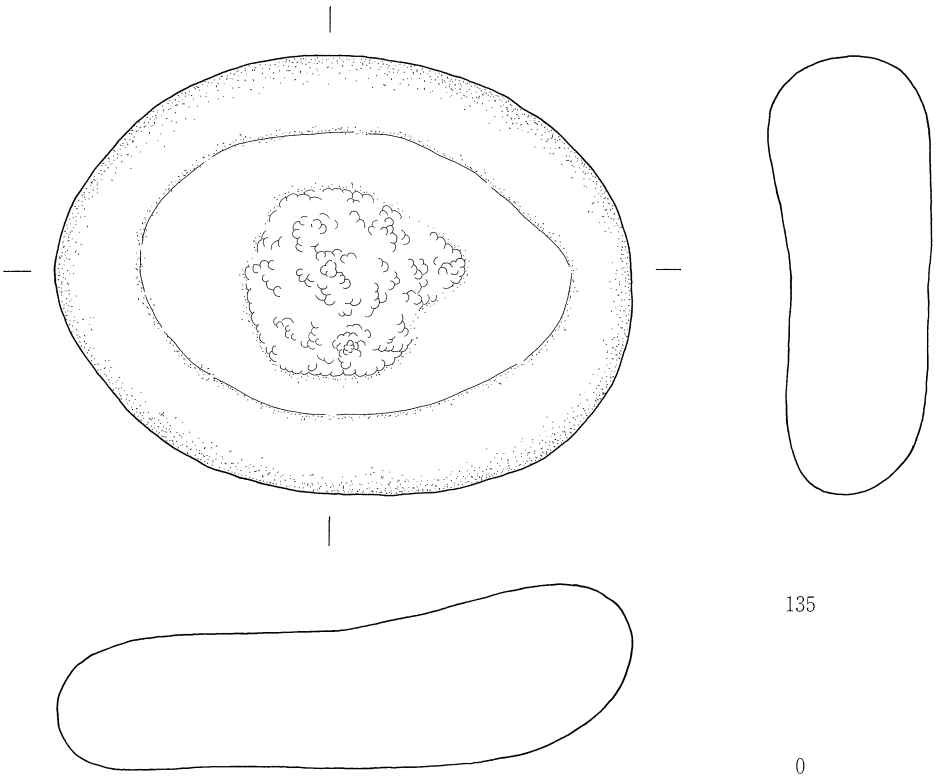
132



133



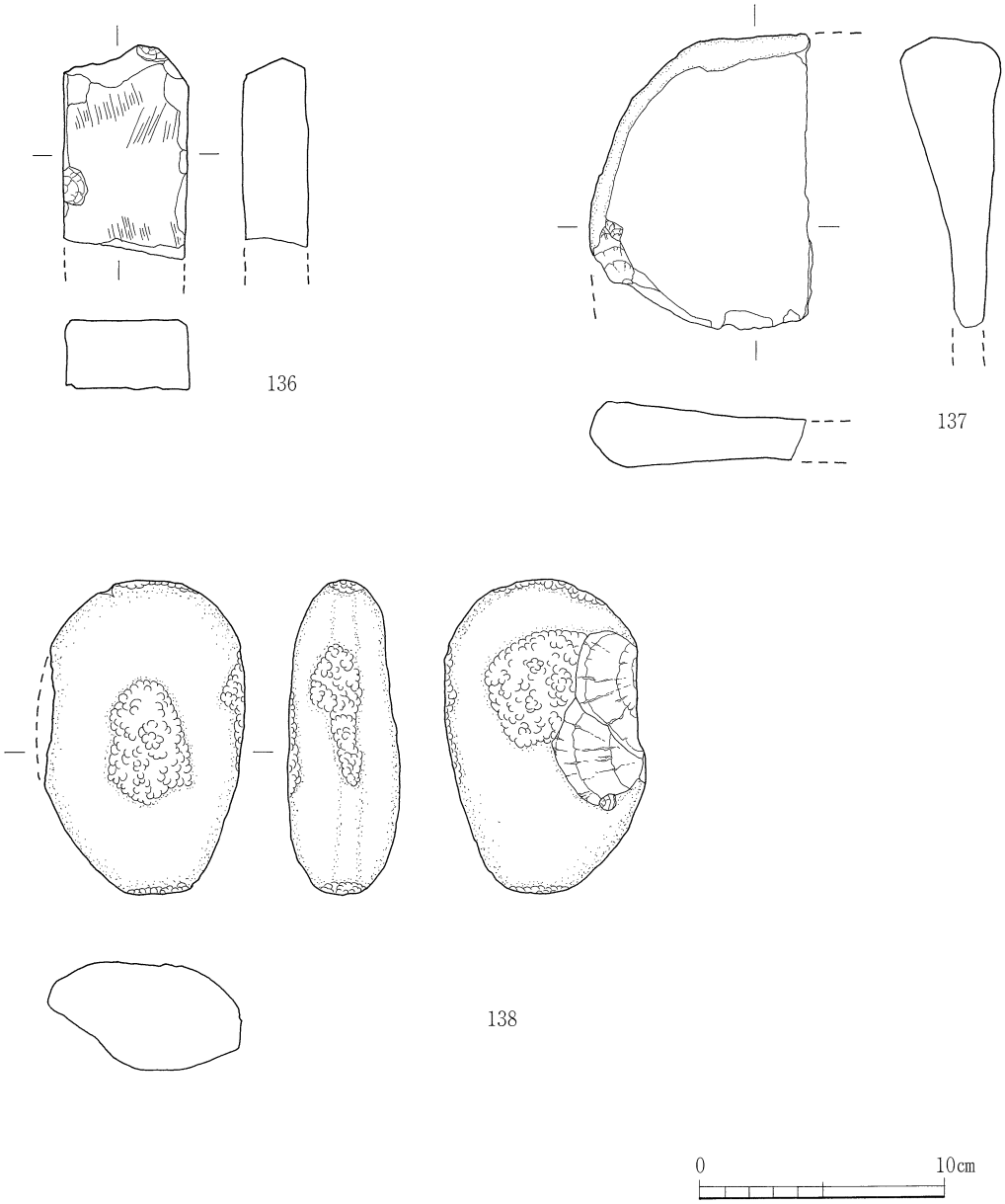
134



135

0　10cm

第35図　調査３区出土遺物実測図（1）



第36図　調査３区出土遺物実測図（2）

第V章　まとめ

今回の発掘調査において、遺構は弥生時代後期の住居跡７基、土坑２基、近世～近代にかけての溝跡３条を確認することができた。遺物は旧石器・縄文時代の石器、弥生時代後期～古墳時代前期の土器・石器、17世紀初頭の磁器片が出土した。以下に内容をまとめてみたい。

旧石器時代～縄文時代

石器が４点出土した。黒曜石製の細石刃核や小型の磨製石斧等、個としては興味深い遺物が出土したが、数的に少なく、共伴遺物等今後検討すべき課題が多い。出土層位は牛深市内の原遺跡出土石器群の出土層位と対比できるようである。天草島内では細石刃文化期の資料は絶対的に少なく、西海岸地帯では初めての事例である。資料の増加を待って、改めて検討したい。

弥生時代後期～古墳時代前期

上木原遺跡では、遺構内外から大量の弥生土器が出土した。これまで天草島内では、発掘調査の事例自体少ないこともあり、弥生土器の出土はほとんど確認されていなかった。表採資料で幾つかの遺跡が知られ、また、発掘調査でも黒髪式土器系統の破片が若干確認されているにすぎなかった。故に、天草島内の弥生土器はおろか弥生時代の状況自体全く分からないと言っても過言ではないのが現状であった。上木原遺跡の発掘調査によって遺構に伴う一括資料が発見されたことは天草の弥生時代研究において画期的なことであり、今後天草における指標となるべきものであると筆者は考えている。

上木原遺跡出土土器の中で遺構に伴う一括資料として把握できるものは、２区Ｓ－002と１区Ｓ－003の2つの遺構から出土した土器群が挙げられる。共に当時の器種構成を把握し得る一群である。以下、それぞれの遺構毎にまとめてみたい。

Ｓ－002出土土器群は、甕形土器、壷形土器、高坏形土器、器台形土器で構成される。甕形土器をみると、脚台付の甕形土器であり、熊本における弥生後期後半の土器として知られる野辺田式土器の範疇で捉えられるであろう。第18図43、44のように口縁部が内湾して開き、端部をつまみ出すという特徴を持つ甕形土器もあり、判断に苦しむ部分でもある。壷形土器は比較的器種が豊富で、口縁形態が広口のものと複合口縁のものがあり、複合口縁は更に多様である。第18図47は北部九州の下大隈～西新式の段階に類似する系統の特徴を備えている。また、第19図52、53のように重孤文土器も出土している。高坏形土器は３系統に分けられ、第19図58の鉢形に近い、境界部に小突起を持つタイプと第20図59、60の坏部が浅く、口縁部が外反して大きく開くタイプ、第20図62の口縁部が上方に立ち上がり、外方に屈曲するタイプである。59、60は熊本平野で類例があり、62は、県内では「県北の菊池川流域を中心とする系統で、瀬戸内地方に系譜を持つ土器」と類似した特徴を持っている（原田1999）。また、58については弥生時代中期の最終段階に位置づけられており（原田1999）、共伴関係について今後の課題である。このような特徴から、Ｓ－002出土土器群は北部九州地域下大隈～西新式併行期、中九州地域野辺田式期に併行する土器群と位置づけられるのではなかろうか。

Ｓ－003出土土器群は甕形土器、壷形土器、高坏形土器、鉢形土器で構成される。甕形土器はＳ－002同様野辺田式土器の系統である脚台付甕と、第８図３、４のように器壁が薄い長胴甕がある。特に、後者の口縁形態は庄内式併行期の特徴と類似し、共伴関係について課題を残す。壷形土器は多様性に富み、大きく３系統に分けられる。即ち、北部九州と類似した特徴を持つ一群（第８図９、10、第９図12、13)、熊本の在地的特徴を持つもの（第９図14)、南部九州地域の特徴に類似するもの（第10図16）である。中でも16については第Ⅳ章第１節（2）で述べたように熊本県内で類例は無く、南部九州弥生後期の高付式に類似している。しかし、口縁部形態に若干の差異が認められ、筆者は時期差による形態差と考えている。高坏形土器は、器形の特徴から２種類に分けられるが、両者とも16同様南部九州地域に類例を求めることができる。ただし、第Ⅳ章第１節（2）で前述したように細部で特徴が異なる。鉢形土器は丸底で口縁端部まで湾曲して伸びるタイプと口縁部が屈曲して伸びるタイプの２種類がある。

中村直子によれば、高付式に後続する中津野式期において排他的要素を脱却し広範に分布が拡大するという（中村1987)。高付式に関しては類例というよりも祖形という表現が適切と考えられるが、北部九州編年との併行関係、形態差を考えればＳ－003出土土器は南部九州地域の中津野式に後続する時期、北部九州地域の下大隈～西新式併行期、中九州地域の野辺田式期に比定される土器群と位置づけることができるのではなかろうか。古墳時代前期の土師器については複合口縁壷等が挙げられるが、出土数は少なく、遺構に伴って判断材料となり得る資料に欠ける。生活を示す資料であることは間違いなく、周辺に当該期の遺構や集落の存在を想定させる。

以上、上木原遺跡出土土器の中でＳ－002、003を概観してみたが、共に弥生時代後期後半～終末期に位置づけられる事が分かった。ここで重要なことは、土器の特徴から広範な地域間交流を行っていたことを示唆するということである。移民であったのか、交流であったのか。交流の場合、交易のような形で何らかの媒介が存在したのか。周辺地域を含め、今後解明していかなければならない問題である。

また、今回の発掘調査において、当時の生業の問題が残された。出土遺物は土器、石器のみで他に生活を示す道具は出土していない。石器は敲石・磨石といった植物質食料調理具が大半を占めている。このことが何を示すのか。それは、天草という地形的な要因によるものではないかと推測される。元来天草は山間部と狭長な谷部が大勢を占め、平野部や台地部といった地形が少ない地域である。特に上木原遺跡が所在する天草西海岸地帯は天草島内でも難所と言ってもいい場所で、苓北町志岐の一帯を除いて山林が海岸近くまで延び、海岸は断崖絶壁の地形が多い場所である。現在でも可耕地は少なく、農業は発達していない。周辺の谷部は干拓によって開かれた土地で、上木原遺跡に生活していた当時は海であった。その様な環境の中で、山野で採れる木の実等の植物質食料への依存度は比較的高かったのであろうことは容易に想像でき

る。ただ、疑問なのは狩猟・漁撈等の道具が全く無いことである。当然狩猟により動物質食料を摂取していたであろうし、製塩土器が出土した、ということは上木原集落に生活した人々が眼下の海岸まで足を運んでいたことを示す資料である。しかし、狩猟・漁撈道具や魚・貝類等海生生物を食べていたことを示す物が無い。これについて筆者は、集落間分業の存在の可能性を考えている。上木原遺跡を含め山頂付近から谷部まで、木原地区一帯から弥生土器が表採されることは周知のことであり、つまり、木原地区の斜面一帯は当時の集落域であったのではないかと考えられる。標高が高い位置に住んでいる人々と海岸線に近い場所に住んでいる人々、相互補完関係の中で生活をしていたのではないか。このような可能性も否定できないと考えている。

製塩土器について

今回の調査で、調査２区包含層中から製塩土器が１点出土した。熊本県内で製塩土器が注目されたのは天草下島の五和町に所在する沖の原遺跡の発掘調査において大量に出土したことがその端緒である。沖の原遺跡の調査により「天草式製塩土器」を設定した近藤義郎氏の報文によれば、６～７世紀の所産であると位置づけられている。

その他県内では三角町太田尾遺跡、松橋町大野貝塚周辺、不知火町黒田遺跡、三角町小鹿里遺跡、同塩屋浦遺跡、大矢野町串遺跡、同小波戸遺跡、五和町中ノ尾製塩遺跡、同沖の原遺跡、苓北町出来町遺跡の10遺跡からの出土が知られている。この10遺跡に共通する点は遺跡の立地が有明海沿岸部に分布していること、標高15m以下の低地に所在することが挙げられる。このうち、発掘調査によって出土した資料は沖の原遺跡・出来町遺跡のみであり、塩屋浦遺跡採集品を除けば全て「天草式製塩土器」である。これらの資料はその殆どが採集品であるため時期については不明な点が多い。

上木原遺跡出土の製塩土器は、包含層中からの出土ではあるが、弥生時代後期～古墳時代前期よりも新しい時期の土器は出土していない。よって弥生時代後期～古墳時代前期という時期に位置づけられるが、弥生時代の製塩土器はこれまで報告されていない。立地条件にしても、天草灘を眼下に望むとはいえ標高約90mと比較的高地である。しかし、前述のとおり発掘調査によって明確に確認された事例が少ないため、近藤氏のいう６～７世紀よりも古い段階の事例は今後十分に考えられるので、遺跡の立地も含めて、発掘調査による事例の増加を待って検討したほうがよいであろう。

参　考　文　献

佐原　真編　『弥生土器Ⅰ』　ニュー・サイエンス社、1983年

鈴木道之助　『図録・石器入門辞典〈縄文〉』　柏書房、1991年

熊本県企画開発部土地対策課編　『土地分類基本調査　本渡・口之津・高浜』　1992年

天草町編　『町政のあゆみ』　1983年

本渡市史編纂委員会　『本渡市史』　1990年

天草町郷土史編纂委員会　『天草町郷土史』　1978年

五和町教育委員会　『沖の原遺跡』　1983年

本渡市教育委員会　『本渡北小学校プール遺跡調査報告書』　本渡市文化財調査報告書第８集、1988年

牛深市教育委員会　『椎ノ木崎遺跡試掘調査報告書－熊本県牛深市深海町所在－』　1989年

熊本県教育委員会　『柳町遺跡Ⅰ』　熊本県文化財調査報告第200集、2001年

熊本県教育委員会　『蒲生・上の原遺跡』　熊本県文化財報告第158集、1996年

高木正文　「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第６号、1979年

野田拓治　「古式土師器の成立と展開－特に中部九州における編年試案－」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』、1982年

石橋新次　「中九州における古式土師器」『古文化談叢』第12号、1983年

原田範昭　「中九州における弥生時代後期土器の編年－熊本平野部の土器にみる社会背景－」『先史学・考古学論究Ⅲ』龍田考古学会、1999年

河浦町教育委員会　『河浦町郷土史』第三輯、1962年

中村直子　「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号、鹿児島大学法文学部考古学研究室、1987年

熊本県教育委員会　『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ－製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作所－』熊本県文化財調査報告第38集、1979年

坂本経堯・坂本経昌　『天草の古代』1971年

写　真　図　版

写真５
Ｓ－002より天草灘を望む

写真６
Ｓ－002遺物出土状況

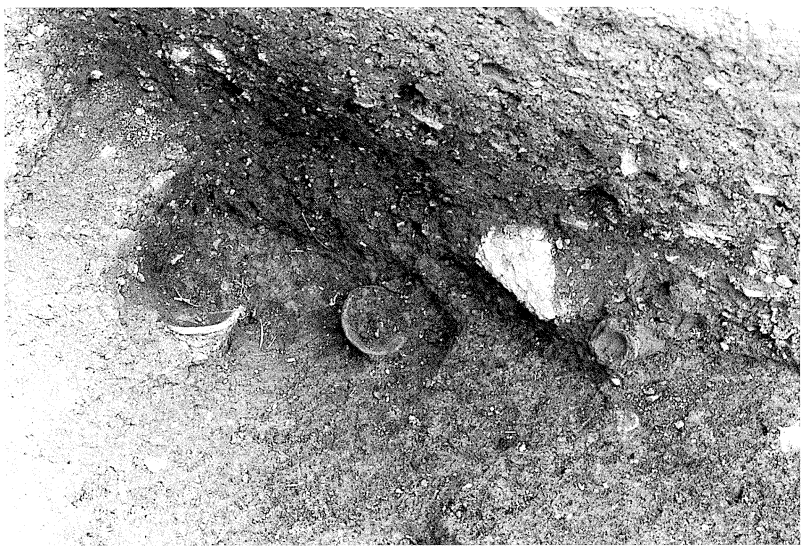


写真７
Ｓ－002遺物出土状況

写真８
Ｓ－003遺物出土状況（北より）

写真９
Ｓ－003遺物出土状況（西より）

写真10
Ｓ－003遺物出土状況（壷・甕）

写真11
Ｓ－003遺物出土状況

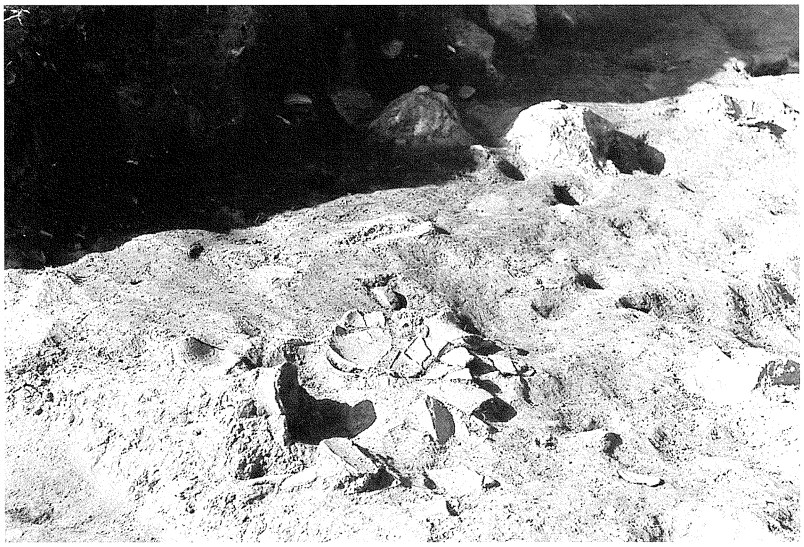


写真12
Ｓ－003遺物出土状況
（甕脚部・鉢）

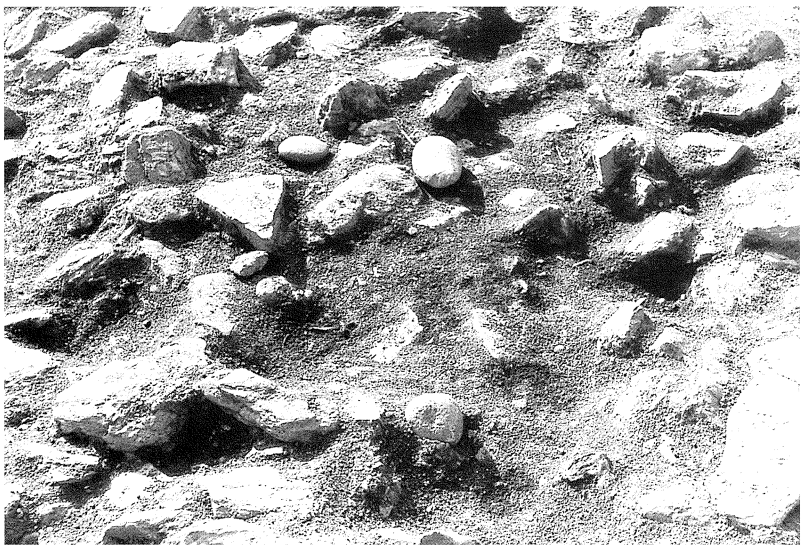
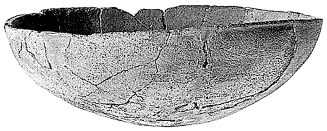


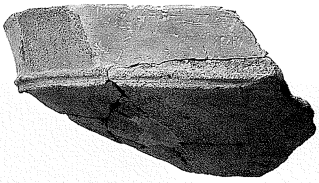
写真13
調査２区石器出土状況（敲石）

14

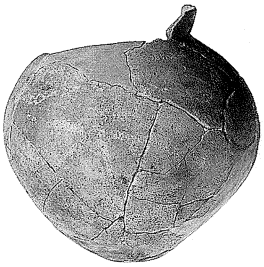


27

12



20



9

7

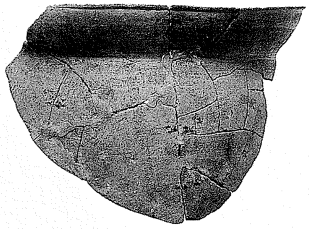
16

17

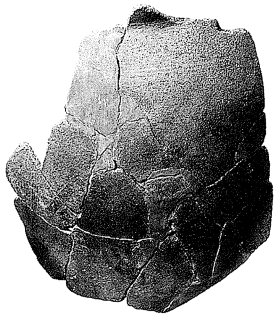
写真14　出土土器（1）

11

39

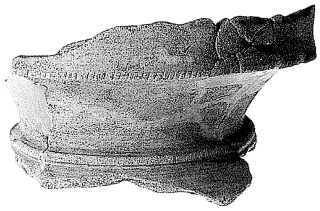


3



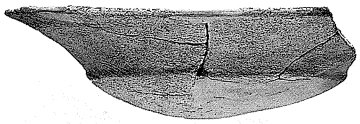
4

113



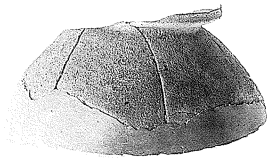
90

58



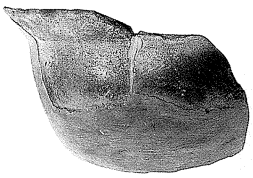
60

写真15　出土土器（2）



71

24

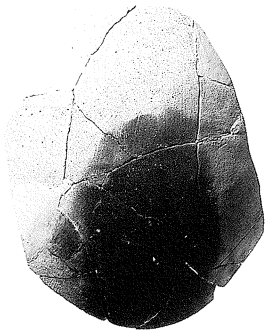


28

10

19

95

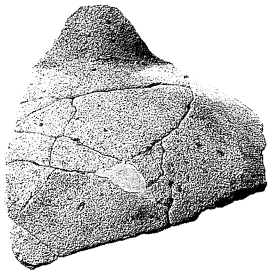


87

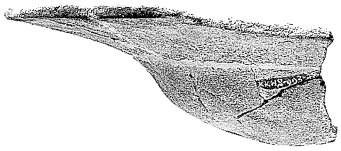
19

写真16　出土土器（3）

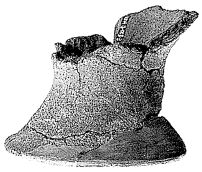
111



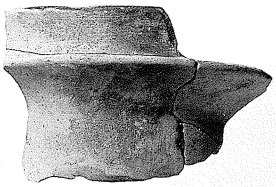
13



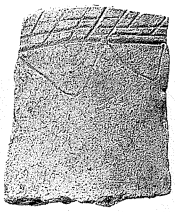
21



8

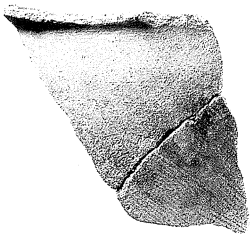


47



114

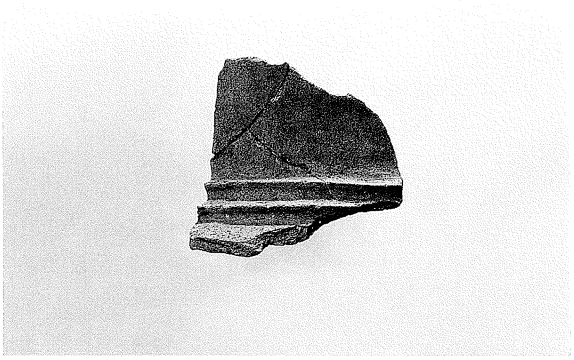
115



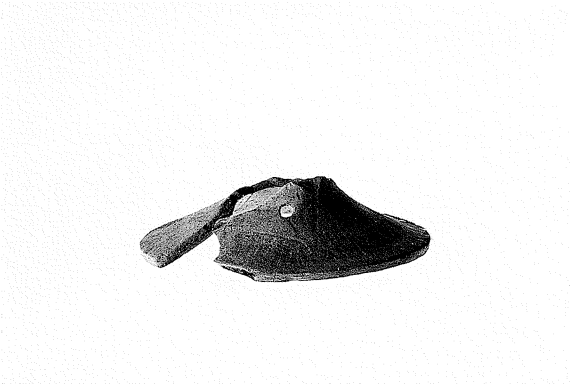
78

写真17　出土土器（4）

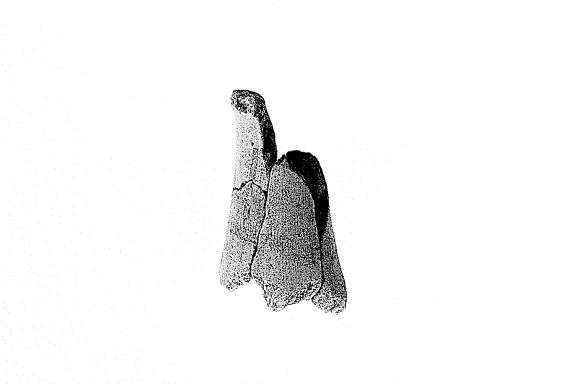
101



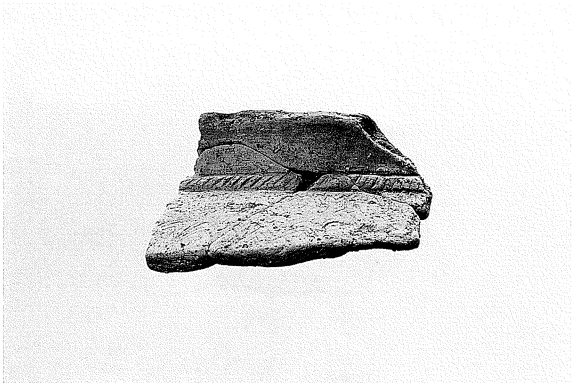
91



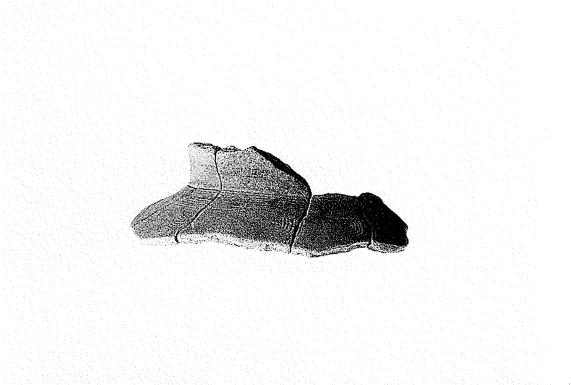
75



73



37



88

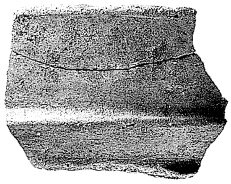
38

25

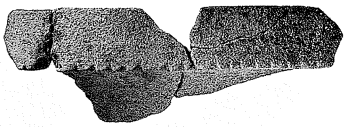
写真18　出土土器（5）

110

79



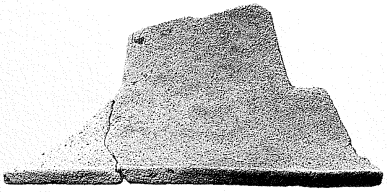
100



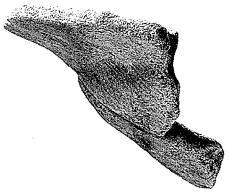
96

76

41

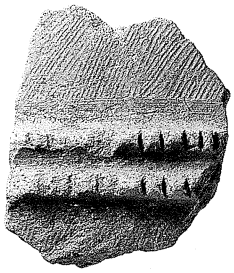


67



74

写真19　出土土器（6）



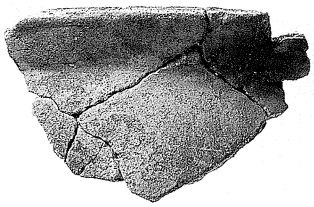
82

64

66

63

46



40

55

56

写真20　出土土器（7）

65

118

117

133

132

1

2

大江遺跡表採の石斧

写真21　出土石器及び周辺地区表採の石器

大江遺跡表採の石斧

大江地区表採の石斧

写真22　周辺地区表採の石器

報　告　書　抄　録

ふ り が な	かみきはらいせき
書　　名	上　木　原　遺　跡
副　書　名	県営羊角湾周辺地区中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	天草町文化財調査報告
シリーズ号	第１集
編 著 者 名	松本博幸
編 集 機 関	天草町教育委員会
所　在　地	〒863－2804　熊本県天草郡天草町高浜乙第501－１
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみきはらいせき 上木原遺跡	くまもとけん 熊本県 あまくさぐん 天草郡 あまくさまち 天草町 おおえ 大江 あざかみきはら 字上木原	43532	未定	32度 52分 08秒	130度 35分 36秒	20010820 ～ 20011228	2149	県営洋角湾 周辺地区中 山間地域総 合整備事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主に遺構	主な遺物	特記事項
上木原遺跡	集落	弥生時代後期～ 古墳時代前期	住居、土坑、ピット群	弥生土器・石器 土師器	
	畑	近世～近代	溝状遺構	磁器	磁器は17世紀初頭

あ と が き

現地調査から整理作業・報告書作成まで足掛け２年の歳月を費やし、ここに報告書を刊行することができた。天草町にとって初めての埋蔵文化財発掘調査実施であり、また、その成果は天草島内初の弥生時代集落という、全てに「初めて」がつく調査となった。筆者にとっても担当者として「初めて」の調査・整理作業・報告書作成であった。様々な思いが交錯する中で刊行することができたこの報告書は天草町にとって、筆者自身にとって記念すべきものである。これもひとえに、発掘調査から整理作業・報告書作成に至るまで多くの人達の協力と御指導・御鞭撻の賜物であると感じている。最後に、御理解を得、協力いただいた関係者の皆様に「ありがとうございました」と、感謝の意を表したいと思う。

天草町文化財調査報告　第１集

上木原遺跡

2003（平成15）年３月31日

編集　天草町教育委員会
発行　〒863－2804　熊本県天草郡天草町高浜乙第501－1

印刷　白木メディア株式会社
〒862－0976　熊本市九品寺５丁目９－35